



45
276

菊の秋

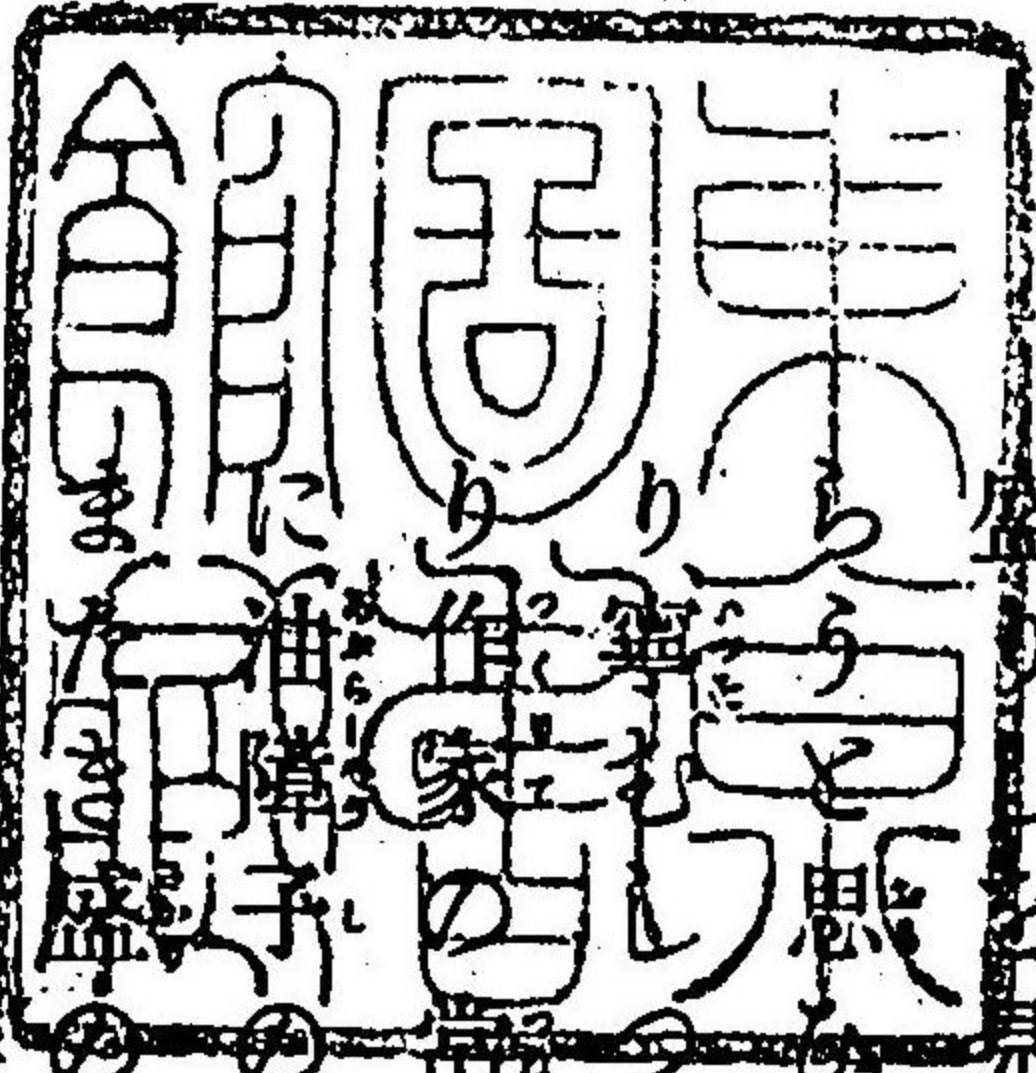
菊

菊

菊

させわたの序

今日になりて菊作らうと思ひけり、とは誰人も黄菊白菊咲
 盛りに見えて思ひ合する事なるべし、今日になりてよく作
 り、寧ろ思ひけり、とはこれ拙者が我舊作を見て述懐の恨な
 り、作家の情、アテ捨やうかの後に續いて自慢氣の出るは拙な
 り、油障子の花、手をかけ垣根なる菊のきせわた今日見れば
 また、盛の花、咲にけり、の古歌を柱よ葭の杖作り立て、偕み
 れば、聊か句のなきにもあらじと、其水を飲めば、齡を延る、菊
 潭の在る南陽ならぬ、春陽堂より世間へ再び出す事とはな



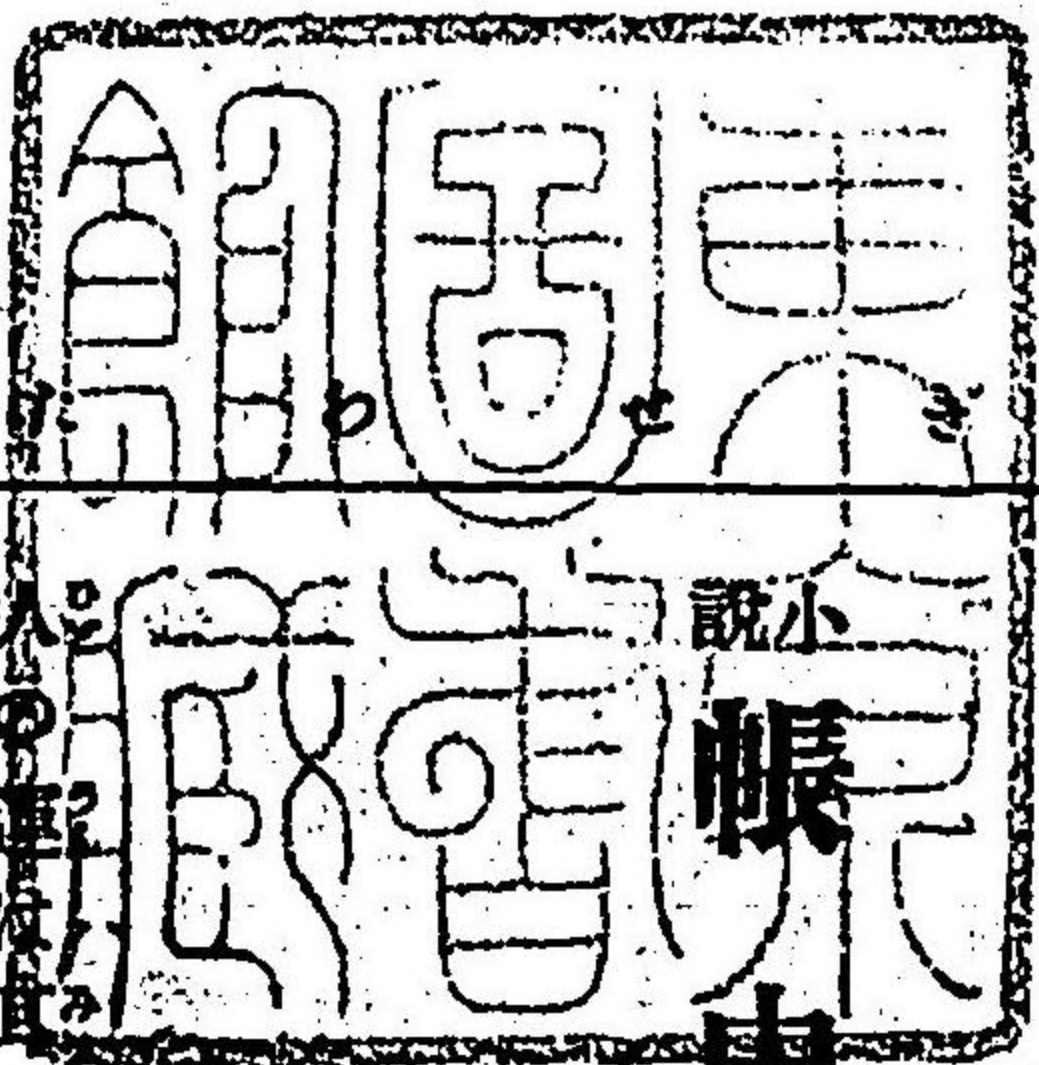


しぬ延喜の御代の菊合勝氣になりては云ふもの、伊勢が隣の家にはあらで垣越に貫ふや菊は皆赤きと蒼虬が頭を搔きし恨はかへりて讀者にあらんか

籬の菊に獨笑ひの目くばせして白衣の使者の來るとを當なしに待つゝこ

竹の屋のあるじ記す

きせわた



小説帳中説法

與太郎の現責

響庭 篁村

人の運は其稔といへど此憐なる與太郎は其耳をば妻の舌香が専有の受聽器として用はれたり、妻は其耳を錫の漏斗ともしひてや其處より絶えず我智恵をば夫の腦裏へ注ぎ込みぬ、妻の唇より出る智恵の流が絶えず此器具にて與太郎の腦裏へ注がれる其様を云へば瓶に湛へし葡萄酒を壘へ

詰めるに異ならず、婦言聞くこと勿れといふ昔の訓へあるをおもへば聖人君子も随分と耳を漏斗に用はれたる覺えある故誠られしものならん、漏斗で注ぐ葡萄酒も砂糖を加へてあるなれば頂き心もよからんが、お香が唇より流るゝ葡萄酒はツンとする香があるばかり砂糖は少しもなし、砂糖氣なきも道理かな與太郎が性質の甘味澤山なる事を妻は元來よく知りたれば甘味は夫の持前に任せ、粗製のまゝの酸ばい水のみを「助言」といへる銘を打て矢鱈無性に注ぎ込みぬ

女房に廻されて與太郎殿は人形同様といふ志か其人形やブリキの汽船ゴムの球を店に並ぶる手遊屋なり、彼面が欲しい其の笛見せよと買人のワヤクに晝は中々忙しく妻が述立るむづかしい教をよく噛分ける暇もなく又其の忙しさを云前にして夫が座を外して折角の助言を半分直切る事あり、價値ある葡萄酒を注ぎ溢すは勿体なしと智慧漫々たる妻の工夫、毎夜寝に就きてより枕を注意として惺々絮々を説かけしる、此工夫こ

そ凄じけれ、歐羅巴の學者達も「最も強く且最も明確に道徳上の感動を與ふる説法をなすは夜か晝かいつれが宜しきや」を論じて夜は人の心鎮靜して利目よしとの判断は下したり、また希臘の哲學者も其著述したる深奥の道理は皆ランプの臭を有するものなることを自白せし事あり、賢くも此女房其の理合を合點して常に其の智慧は油煙臭く行燈の紙と共に燻りていと細なる針の穴、大の字の形をもなしにけり

宵感ひや朝寝坊を取除としては人の寝る間は八時間が通例とは先づ能い相場、昔の稼人は子に臥し寅に起るなどタツタ二時眼を合せれば鳥より先に床を離れ、今の紳士は朝飯を晝にしてこれが文明風と誇る、文明風とあつて見れば八時間は誰でも餘儀なく横になつて居ねばならぬ、與太先生に取ては此餘儀ない八時間、大抵夜の十一時頃から朝の七時頃迄、此間が智慧ある妻女の御説法時刻、併しソコは夫婦の間、何も戦に勝て其膚をたしなむるほど手烈しくもなく、夫が半分夢で居るを偶にはゆる

す寛大さもありしとなり
お香は何處で聞覚えたか一の西洋の俗謡を遊奉して其通りに行ひぬ曰く
「ミナルベといふ女神の使しめの鳥は鳥の中で一番伶俐で晝は黙つて夜の
み叫ぶ」と此賢い女房は誠に此女神の使しめ歟、たづねて見れば其鳥は、
鳥なりとか、怖やなく

與太郎といへばとて著者自身の懺悔話にはあらず泰西名家の名作をチ
ヨッピリ假り三馬風の獨話と爲たるなり、袴の腰板ヨチるが大事謎々
なにも當付に誰と指したる事にはあらず、終に至つて「結婚」といふ
題の一議論ありそを樂みに讀ませ玉へ

舌の七靈

一家中私と思ふやうにする、と川柳點の穿ち通り昔の作家騒動も根をた
づぬれば皆女、それらは成上りの悪心からなれど、正當に結婚の式を舉

げし妻女は利害を夫と共にすれば家の亂れを願ふやうな事はなく、夫大
切家大事、それが高じて夫のまだるしさに黙つて居られず、裾ヒラリと
裾捌き、ツベコベ口の異見助言、せくろしい女の氣からは尤も至極、女
さかしうて賣損ふといふ牛の涎のダラダラした男には氣嵩の女房、これ
も自然の取合せ大雅玉蘭では世帯は廻らず、女が根々となるでヌボラも
床間に飾らるゝなり、左れど此與太先生北山の馬の性、お香は申か掻む
しるほどの才發さ、馬を乗り廻すを馬摺神とて滂幣を擔いで尊まるゝも
此事か、其上に男女二人の子を擧げたればます、陰陽轉倒して與太殿
いよ、腕が利かず、女は子を以て貴しといふ極相場を外れての高上り、
トは云ふもの、全く此内助によつて店も廣げ奥も豊にはなりしなり、お
香は夫子家の事に餘り息勢張つて肝を焦しゆるか元氣のよかつたに似ず
肺病に罹り、病の床にありながら繰りの糸のこぐらかり、ヤキモキする
ほど重り行きて、つひに與太郎の爲に二十年來の重荷をば取除けり、憐

は誰の身も同じながら與太郎は一倍の力落し、綿の重い夜着に馴れたものが急にサラ綿の軽いのを掛けたやうに壓力がないだけ寒い心がして、倚かした柱を取られし如く茫然たりしが、お香が夫を訓へる熱心は死んでも舌に止まりてか寝に付ければ例の錫の漏斗に唾々々々注ぎ込は絶えず、女房が呷き耳を離れず、眼を開て見ても閉て見ても、耳を塞いでも枕で押へても、寐さへすれば女房の説法、存生の時に少しもかはらず、與太郎もホツト此現實に持餘せしがつく／＼思へばこれも亡妻が我を思ふのあまりなり、これを安心して極樂に行くやうにするは御寺様の寐ぼけ聲の御經よりは毎晩の説法を書とめて永く形見と見て其教に隨ふが一番よからんと、思付し其夜より妻の呷を心にとめて朝ごと詞のまゝ書とめて十八條に及びしに彌陀の悲願に數を合せて舌の亡靈は得脱してや、與太郎の夢にあり／＼と、舌根より金色の光を放ちて西の方へ飛び行ぬと見て其後は枕静かに夢も安し、即ち其與太君の筆記此帳中説法なり此

書の成立縁起因縁件の如し、人々信を取てよく讀み玉へかし

第一 朋友に貸した十圓

モンお前さん引窓が風で煽る彼音が聞えませんか水口がガク／＼しますよホンにお前さんといふ人は此身上を何と思つてお出なさる暮になると竊盜が多い何一盗まれても容易な事ではない夫にお届の分署へ出るのど其手数は皆私しがしなればならないダカラ裏口の戸締りを直させてと口が酔くなるほど云ても明日の明後日の彼だけ手を入れても二三圓は掛るのと筆の軸で頭を搔て居なさるに私も御金が現に入ること此暮には物入も多しア、何ぞ不意に入るものはないかと待に強ても云かねて居るとマア有らう事か今日飲仲間信助さんが来て急に家へ内々で入用があると云出すと能い純帳の幡隨院長兵衛を氣取て十圓で能いのかモット入るならとマア驚いた九長へ拂ふつもりで掛硯へ入れて置いた十圓をホイと

貸して仕舞てサ私も餘りな事に呆れてアレとも止めかねるうち信助めは
 欺し取た嬉しまぎれ奥から出る私の姿をチラと見ると頸を縮めて逃して仕
 舞をツたマアお前さん考へて御覽なさい家へ内々で入るといふ金に確な
 事が有ますか夫婦は一跡といふ其女房に隠し立をして他で金の才覺何に
 其金を遣ひませう水臭い後暗い友達に金を借からはお前さんも大かた私
 に隠す後暗い事が有るでせうイ、エ朋友の信義なんぞと左様な逃を云て
 もいけません夫なら貴方は朋友に信義が立ば家の者は風邪を引かうと熱
 病にならうと喰ずに居やうと構はないのですか惘然に小太郎が引窓がガ
 サ／＼する度にヒク／＼として是では今に驚風にでもなりませう水口の
 隙から寒い風が来て不便な此お君の領へ入りませう風を引いても貴方は
 醫師にも掛て下さりませうまいは醫師に拂ふ薬禮は朋友の信義といふ立派
 な事にお遣ひですものを嗚呼不仕合の子供達も慈悲深い親父様は朋友の
 信義といふ大層な事に大事のお金をお捨なすつて下さるから病氣に罹つ

たら直に遠い有難い處へ参るものと覺悟をせねばなりませんぞホンニマ
 ア彼の十圓を彼様捨るなら水口の締も丈夫に直して親子夜を安く眠られ
 やう引窓も厚硝子で明るく確り出来やうものまだ其あまりでお前たち兩
 人を連て江の島鎌倉へも行れやうに……行れませうとも貴方が朋友の信
 義にお捨なさるだけあれば何をしても十分です勿論私たちが行くのは貴
 方たちが信義がつて浮宴會をお開きなさるとは違まして白粉を付たり島
 田に結た鐵道の役人は居りません小太郎とも君はまだ半分で通りますナ
 ニも榮耀の遊山のと云ではなし此夏同級の子が行くから行たいとせがん
 だのを親父様が斯して學校へ遣て下さるのはお大層な事ではないと叱つ
 て置ましたが知らぬ土地を旅するのは智識を増すばかりでなく新鮮の空
 氣を呼吸して身軀にも大層能いとやらお君が此頃腹の底から切るやうな
 低い咳あれを貴方は何とも思つてやりませんか江の島鎌倉の海の氣でも
 吸ひ晴晴としたらあの鬱症も癒りませうさぞ悦びも致しませう嗚呼それ

も是も朋友の信義の爲に皆ならず憐な君は養生も出来ず今に悪くなつたら見殺にするより外はない併し貴方は朋友の信義が立てば本望でせう
 ホンニくお前さんといふ人は……

第二 外尊内卑の交際倒れ

内悪の外善とはホンニお前さんの事ですよ、家の事にはなくてならない物を買にもチイくして外の事だとパツくど大氣に遣ふとは何といふ間違た事です、此間も一寸店へ来いとお呼なさるから急用かと思つて奥から出て見ると慌だしく腰の廻りを探つて烟草入の中へチヨロツ二三圓入れて今仁平さんの事で急に寄合があるから行て来る少しの間店に居ると左もくらしく行なすつて夜になつても歸らず彼時君が何だか食付ないゆゑ王餘魚を一尾買て魚屋の皿ごと戸棚へ入れて戸をメヤうとするときお前さんがけたましく呼なすつたから其まゝ行て店番をして居る

うち盗賊猫が入つて皿ごと引くりかへし皿は落ちて破れる魚は啣へて行かれる夫もこれも皆なお前さんが内は構はず外交際ばかり大事になさるからだ喰ない王餘魚の代が十八錢皿の價に十錢よもや取まいと思つて出たを魚屋は不足さうに持て行ました其通り世間はヒスコイにお前さんはいつも春がツて友達の煽に乗て交際がつて如何なさる外の人の受さへよければ内はどんなにしても能いのですかモシお前さん交際が何になると思ひなさる私の眼から見ると能い馬鹿の共進會だち互に内の者の咽喉を乾していけもしない外飾くらべをして今の鮫鱈はまだ喰えないナンテ高慢を云て内ではみんな焼豆腐もろくには盛分もしないでさ仁平さんでも信助さんでも何で心から深切なものか蔭ではお前さんの事を悪く云て居るに相違ない夫と知らずに俠氣がつて人の割前まで脊負て重たがらないとは餘り齒痒いモシお前さん世間の人が疑らずお前さんの様だと思つては大變に違ひますよ皆自分の便利都合の爲ばかりで交際するので深切と

いふ事が若しあれば夫は穴へ落たとき上から土を掛て呉るぐらゐなもの
 ですよチットお前さんも氣を締めて世間の人は物を云ふ狼と覺悟なさいよ
 お前さんが彼時にも仁平に欺されて引出されなければ子供も美味がつて王
 餘魚を喰てどの位身軀の養が付いたか知れず又魚屋に皿代を取られもし
 ません夫ばかりか彼から盗賊猫が味を覚えて少しの隙も狙ひ込み鱈の切
 味だのいろ／＼の物を取られましたまだ何を引かれるか左様は私に番は
 届きませんソシテマア其時の寄合にどんな利益があつたかと思へば仁平
 と信助が酔た上で喧嘩を始めそれをお前さんが取押へるはづみに襦を踏
 んで膳の上へ轉んだとやらで羽織の裾と衣類の腰の所へベツタリ染を出
 來してサ私が忙しい中に丹精して縫上たばかりの羽織たどひ唐棧の平生
 着でもお前さん手を通すまでにはどの位手が掛ると思なざる嗚呼貴方が
 内の事にかへても勤なさる交際といふ事から起る利益といふは斯ういふ
 事です其時も己が中へ入ッて其座で和睦させたと手柄らしく話でした

が其自慢と自惚で其時の勘定を引受たのでせうイ、エ隠しても知れて居
 りますチヤンと紙幣を二三枚煙草入の中へ入れたのを見て置ましたお歸
 りのとき密と明て調べたが有ません……は覽なさい此寒いに小太郎は
 まだ綿入羽織も出來ませんよ……

第三 なくし物

提灯の貸倒れは電氣燈瓦斯燈のお蔭で大きに少なくなりましたがまだ傘
 の貸捨は澤山です夫に此方から氣をよくして降そうだからお持なさいと
 はマアお前さん如何したものです夫だから皆が内兜を見透して夜も暇さ
 へあれば夜食糍ぎに押込むのです雨が降り出したトタンに人が來たら此
 方から先へ此空では直止ませう是が眞の傘供雨といふのだと斯う初太刀
 をお付なさい夫でも向ふが切込そうなら大きな聲で私を呼んで今日も降
 そうだが一本あつた傘は此間何處へか貸したそうだな家で困るから今の

うち取にやッて置かッせよと斯うお前さん力身をつけて云ふと立派でも
 あり向ふは二の矢が繼げません其處をまた私しは甘くお前さんを立て調
 子を合せますそんな時には少しいかつく叱るくらゐに云なざるが能い
 私が恐れ入て見せればお前さんのチヂも利くといふものだ私はどうも
 前さんが叱り廻して呉れるやうになつたら嬉しからうと思ますよホソニ
 偶には云過もあるのは普貴方を世間に光らせやうと思ふからですよ悪く
 お聞なざるな此間も禮助さんが正午時分に來て長咄し掛合のは膳を出し
 たッて大抵の事ぢやアない何も物を吝むばかりではありません手のない
 中に世話でもあり癖になりますから早く話しを此方から切上げれば能い
 とおもふにお前さんがヘシ／＼と面白そうに受答をして向で入れる煙管
 を筒からまた出させるから氣が氣でなくて居ると號砲が響いたからソラ
 此が豫て教て置いたホソ家の時計が進で居たので一時も早く晝飯を仕舞
 たと云なざる所だと與から半分顔を出して密と咳拂ながら目付で知らせ

るとお前さんがトツチてホソ家の時計は後で居たか正午になるとは氣が
 付かなんだとは餘り情ない間違かた禮助め此ぞと付込んで如何です久ぶ
 りで反毛鶏でもやりませうか實は少し御相談申す商法があると慥から持
 込むから憎いぢやア有ませんか左様するとお前さんは見合した私の顔色
 も忘れて最う出かける支度……呆れますよ貴方少しはお播立なさいよ
 アレ枕元の行燈の事ではありませんお前さんがホソヤリだから明然なさ
 いと云ふ事ですのチ……其の通りだから他所へ出れば手拭とか乃至は
 ハソクチ扇烟管ぐらゐはまだしも煙草入も幾許だか知れませんホソニ小
 太郎が此間西洋小刀をなくして他のを取て呉れとせがむと子供は強請ま
 いにしてやると癖になる何でも其のなくした品を尋ね出させるが能いと
 お言なざる其口は立派であつたが其晩チヨロリ出かけなすつて煙管を落
 して翌日私にも云はずに獨で探して出なすつたではありませんか貴方
 がなくす手拭鼻紙だけでも年に積れば大きいこと昔は麥酒の栓を溜て一

資本にしたといふ人さへ有るではありませんかア御覽なさい向の孝兵衛さんなどは此三日にも年禮に出で彼の通り酔つて歸つたが了簡がシヤンとして居るから一風呂入つて酔を醒すとて袴を取ただけで湯屋へ行つて帯を解くと腰を探ると煙草入が二差子ニ御覽なさいよ此通り他所の人は酔つて間違へても夫れは自分の外に人の間違へて来るほどです此の位でなくて如何して此の世の中が渡れますものか

第四 女に對しての禮儀

此様な事を云つては年甲斐もないやうで可笑しいがお前さんには酒といふ魔がさすから間違のない爲に云て置きます一昨日も一昨日とて私に店をまかせて裏へ出て近所の娘達や女中と遣羽子とは何事ですイ、エいけません其の一寸の洒落が悪うございませう君は彼の通り内氣で肺病下地でもありはしないかと心配になるほどですもの如何して彼の通りガラ／＼

と乾上切つた女達の中へ交つて遊びますものか夫は娘にかづけるといふものです彼連中の笑ひ聲を聞いても私は癪に障る醫師の園者だとかいふ彼の氣障な年増が誰でも構はない男さへ見ればヒロ／＼して夫にお前さんが……イ、エ邪推ではありません子供が聞て悪いといふ所に氣が付て居るなら女なんぞに交つて騒がないが能うございませう子供も聞て置くが藥だ親父さんが是だから母親さんが心配が絶なかつたといふ事を覺えて置くが能うございませう春だから羽子を突くくらゐとは女房の私に對しても貴方些と失禮ではございませぬか貴方も御存じの通り亭主が近所の娘と羽子を突いたのを怒つて大事な所を切つて仕舞た女の事が新聞にあつたでは有ませぬか私はマサカ左様な事も致しません併し貴方私に此方へ嫁入つて参つた時は如何いふ事でございませう夫は能はナでは濟ませぬ子供に何が極りが悪うございませうお目もさましてお聞なさいお前も最う六七年すれば私と同じ運命に出合ねばなりません母親さんに経験が

有るからお前には後で取返しをつかぬやうな悔はさせませんが……分
 かつたでは分りませんが男は女に對する禮儀といふものは有るものです彼
 のマアベタ〜塗りの性の知れない女など私の見る前でイ、エお君が
 左様いひますから私は臺所からよく見ました外に人が居たとは何の事
 す外に人が居なかつたから如何します……嗚呼思ひ出すと悲しい十二
 年前位肥のある海軍の方からも築土の官員の所からも人ぞ以て云込で來
 たのを富田屋の富兵衛さんが官員や軍人は立派ではあるがそれだけの氣
 苦勞がある此方は町人でこそあれ町にも古く住んで暖簾名を人に知られ家
 に氣兼ねの者はなし涉當人は氣作な方で特に當人を見込んで是非欲しい此
 婚姻がならずば店を仕舞て高野山へ籠る男一人捨させる事だからと達て
 の御懇望それも母は不承知で築土の方へ遣りたいと云を親父さんが富兵
 衛に云廻されて……夫に貴方が一心に成なすつて直に母にお談じな
 ざる私には命がけだと仰有る夫で此方へ參るやうになりまして支度も隨

分として参りました其當座は實に貴方もよくなすつて世界中の女とお前
 一人を掛合せても私の量ではお前の方が重と仰有つたヨモヤ忘れはなさ
 いますまい夫もわづかの間でお君が出來て急に年を取たとして……拵へ
 て下さる約束の衣類も連れて往て下さる筈の湯治も……ア、夫もお君に
 掛てど私は夫から綺羅も飾りも忘れて此通り身上の事に苦勞するではあ
 りませんか夫に能い氣で實業苦樂部だ杯と尤もらしい名を付て彼の麥酒
 店を寄合所にして毎晩の様に外歩き何です空射してもいけません……
 お恨みずしては濟ないが嗚呼彼時親父さんが富兵衛さんの言を聞ずし母
 親さんの言通りになすつて下さつたら私も斯う苦勞はしまいのを……

第五 飼犬の繫紐

惘然に小太郎が彼時から氣落して學校へ行く勇みもなくなりました是で
 プラ〜と煩ひ出して死だらば親が手づから子を殺すも同じ事だ彼犬は

お前さん西洋種で眞個に宮様へ献上にもならうといふほどの孫は可愛いの母親さんが漸く貰つて小太郎のお友達にとて下さつたの夫ですから小太郎も可愛がり私も大事にしてチン／＼お預け人間よりもよく聞分る程になつたもの……此頃は猫釣だの犬取だのと晝日中大げさに歩くから一寸も油断は出来ない容貌の好い兒が昔人買に取られ藝のある犬は今犬取に目を付けられるから綱を付けて外へは出さぬやうにして置いたのをお前さんが例の通麥酒苦樂部から泡のやうな理屈を聞喘つてお出で犬を斯う縮めて置いては十分に發育しない折々は放して外を馳させるが能いと私が止まさいと云ふ傍から繩を解いてやつたものだから犬は逸散に飛び出すアレといふうち通りかゝつた馬のやうな大きな犬に吼立られ夢中に驅出して夫限歸らず小太郎が學校の留主だからまだ能いものゝ居たらどんな騒ぎだらう早く探して連れて来てと私があせるのをお前さんは平氣で犬といふものは直にまた歸るものサと不精々々に煙草入を腰

へ差してフラフラと探しに出るとは全で女房に氣を焦らせて早く年を寄せやうといふ仕向ですマアお前さん考へて御覽なさい飛出した犬を追かけるに煙草入が何の用です左様して何處をば探しなすつたのだから二時間も経てまたフラリと歸つて犬はまだ歸らないかどは何の詞です犬といふものはナンテ講釋をして何處に犬といふものはが直に歸りました彼時小太郎とお君の歎き……蟲の毒にならずに何になりませう私は彼晩まで目を合せません曉方に裏口でリンといふのはトクの聲と忙して飛起て見るとトクは他の犬に散々噛伏せられたと見えて首筋に血が付いてヒョ／＼と左も勞れた様子オ、よく歸つたぞ箱へ入れて直に喰物をやりましたが臭も嗅ぎキヤン／＼と引聲に低く泣いて折々身軀をビクビクさせて居ましたが狂犬に噛まれたものと見えて食づいて癒りかけた時分熱が出て大變に吼はじめ夜も吼止まないの胸氣な近所の衆はツケ／＼と當言を云ふ小太郎もお君もそれを心配して夜もろくに寐ず四日目の朝喰物を

やらうとした私の手へ噛み付て驚く間に網を切て飛び出し矢鱈人を吼るばかりか噛付て手に乗らず全くの狂犬となつて砂糖屋のお婆さんの足を喰付たのでとう／＼巡査が犬殺しを連れて来て憫然に逃まよふトクを撲殺した彼時の悲しさ不便さ私でさへ眼を泣張したもの子供達は食も通らず姉弟抱き合て泣て居るいぢらしさ貴方は何と思ひました元の起りは私の云ふ事を用ひずに貴方が犬の網を解いたより……彼時から實にお君も病づき小太郎はトクが歸つて來たのソレ犬殺しが來たのと夜もあひつて囁語ばかり砂糖屋へは語る近所へは能氣味がられる母親さんへは濟す子供に命には拘はるユンナ口惜い悲しい憐な事がまたと世界に有りますか其上にトクが居ないから毎晩私は日本中の盜賊を一人で用心して居ます何時何奴が入るか知れないから

第六 與太郎料理

夫でもマアよくお前さん握箸でなく物が喰れます世に此に不器用と云てお前さんの様なも少ないものだ何事でも少しは氣に止てなされば稽古にならぬ事はないにお前さんは何事も浮の空で其弊に總選舉に民黨が勝ばよいナンゾ高慢な事は仰有るがマア積つても涉覽なさいお前さんや信助さん達がいくら息勢張ても向ふは借くない金が澤山……金に負けなものは開化といふものではありませんよ左様な冗を考へず少しは家の事に氣をお配りなさい偶々障子を張れば上から張下して然も少し雨氣があるどポコ／＼になる雨戸の板が剝がれたから打付て下さいと云へば西洋釘を裏へまで長く出して戸を開るとき私の裾へ鍵裂をさせなされる中では餘り呆れたのは引窓の綱が切れたから一寸付けかへて下さいと頼み申せば階子を掛けて不様に屋根を遣ひなされるミチリ／＼といふ音が止んでもまばらく下てお出なさらぬから最う直つた事と思つて居るとやがて屋根でお香／＼とお呼だから火事でもあるのかと階子を上つて見ると

……實に彼時は可笑くて腹も立ませんでした引窓を引くりかへしたま
 夫をチツト見つめてお前さんが左も仔細らしく腕を組んでお出なさる
 如何したのですと聞けばお香引窓といふものは妙に機ツたものだ如何や
 ヲッて見ても綱を引いて閉たり開たりする工合が分からないッテお前さん
 引窓の紐の付やうぐらゐは子供でも知るものをどうく私の上ッて付て
 仕舞ました其時は成程其の手順か杯と感心してお出であつたがまた其後
 忘れて如何も引窓の紐つけは降參だとは何の事です出刃と刺身庖丁を研
 いで下さいと云へば仕掛ばかり大業で臺所を水だらけにして砥にもロク
 に合せないうち大變だお香袂蕨を呉れとお騒ぎなさる夫で外で開嘴ッて
 來ては是は醤油を用ッては味が重くなる鹽仕立のものだナンテ料理通が
 ヲッて生の數の子を煮たり鯉濃を残らず苦くしたりなさる此間も鱧を魚屋
 が持て來るとこいつは珍らしい近頃東京でも料理屋で是を用ふが兎角骨
 切らずで恐れる己が一番庖丁を見せてやらうと手拭の片襷で臺所へ出か

けたところまでは能かつたが組板の上へ乗せて左手で緊り押へるので鱧
 から煙が出るのですもの彼手際で夏の生物をいぢられては大變だ如何な
 さるのと黙ッて見て居ると刺身庖丁でソロソロ小骨を引いてお出なさ
 る様子全で虱の皮を鎗で剥ぐといふ酸の通りなの先々お氣任せとは思つ
 たが高い魚をお坊様の飯事にされても詰らないと私が代ッて剃刀でソキ
 くやると馬鹿りと隣んで見てお出で如何しても氣遣の者は刃物が切れ
 るといふが眞の事だと感心してお出なさるのだも彼時つくく左様思
 ひました此調子で狡い友達の中へ出たがりなさるから割も喰ふ筈だア、
 芝居事のやうに出来るなら私の生血を瀧ぎ込んでも貴方をキツシリさせ
 たいと思ひましたそれで時々喰物の叱言があるので子供達の時ならぬ物
 を欲がッてマヒタ事を云ます其身分でもないに今から奢くせを付けるの
 は親が勤めて薦を衣と着替させるのです小太郎が成長なッて此身上を潰
 せば夫れは皆んなお前さんのお仕込甲斐といふものだ

第七 仕入物の注意

ナニも私が替り目毎に見たいと云のでは有ません斯ういふ家業をして居れば些は世間の流行といふ事も知らないではなりません芝居が彼處へ出来た此處へ出来たと噂に聞たばかり是では私の身には江戸も山奥も同じこと……羽子板を仕入るにも娘子供に氣に入るは今でも福助と五年十年二つ定規を用つては居られない其上に暮にもお前さんは團十郎の家康公を澤山仕入て己は是が好だとは何の事です羽子板はお前さんが持つのではない彼は賣物です己が好だの最良だので仕入られて堪りますか夫は成程賣人の好は客の好といふ諺はありますが場合が違ひます際物は其時の流行を狙はなければ背負つた時に振切がつかまへん折々芝居を見て置けば人氣の寄る寄らないが分るから十挺のところは二十挺賣れ問屋の通りもよし店も賑はひますドウセ私は此方へ参る前に親類の者と見物しま

したのが芝居の見納めでせう併し参るまでは左様覺悟も致しませんでした……イ、エ愚痴ではありませぬ愚痴が交るにしても是は商賣の爲に申すのです夫を貴方は偶には命の洗濯に往きなさるが能いと御自分の御遊興と差引にでもするやうに仰有るから此間も往かゝりましたが止めましたハ、止めました私は命の洗濯に芝居を見るやうな不束な者ではございませぬ貴方が家業向に違つた事には身を御入なさるが申しては失禮で御座います仕入方に目端がお利なさらない夫ですから私しがせめて芝居へでも……夫にお君も年に一度ぐらゐは見せてやらなくては先へ寄て何處へ嫁に参らうとも餘り肩身が窄からうと……夫に行つた先でまた芝居も見られないやうな不運な事があると身にたまされて惘然ですから……夫も是も私の榮耀では有ませぬよ決して私は身の樂みに芝居を見やうとは思ひませぬよ貴方の方から忙しくもあらうが店は一日小太郎を相手に己が居るから今度の日曜にはお君を連れて世間の流行も知る爲だ

から芝居をチヨツクリ覗いて来て呉れと偶には仰有ッても能からうと思ひます斯ういふと貴方は私しが身勝手手のやうに僻んで空尉をなさるから芝居の事は申しませう……是は家業の爲ですから聞て下さい先刻申した賣人の好は客が好くといふ事は彼様いふ事です貴方も忘れはなさいませう私が一昨年の暮不圖汚ない男が木彫の虎を賣に來たのを餘り能く出來て居るから買て置くと貴方が見て是は家の商物には不向だとケナシなすつて隅の方へ引込したので三年越賣れず何かの時には彼虎がくど私に當てお云なすつたが此間西洋人が來ていろく買物したとき彼虎は幾許だといふから廿五圓だと云ふと通辯の男が頻りに高いと云消ましだが西洋人は確に欲しい様子が碧瞳にチヤンと現はれて居る此が大事の所ですよ客人の様子を見て軟にも硬も出るが驕引といふものです其時西洋人は通辯に何か云はれて買ずに歸つたが明日確に二十圓に負けろと云て來るだらうと樂みにして居ると翌朝私が臺所を手傳ッてヤッて居るの

を慌しく呼で莞爾ながらお香悦べ彼の寐かし物の虎をフイと客が來て三圓五十錢に賣たとは何事其跡へ案の條西洋人の使が二十圓に負けろと來たとき私は思はず身軀中の血が湧上りました彼が男さかしくて虎賣損ふと云ふのです何で御座います笑ひ事どころか今思ひ出して口惜涙が溢れます十六圓五十錢あつて御覽なさい芝居が十度も見られます

第八 吹殻の大穴

阿房州とはよく付けたものだお前さん此燒穴を如何なさらうと思召す焦した跡へ指を入れて見て何になりませう一向己は氣が付かなかつた何時の間にかヤツたか知らんとは何の事です何處の國にか氣が付て居て焦す者がありませんものか全でお前さんは煙草がなければ生て居られないやうだホソニ口の上るものは茶と煙草とやらまだ一昨年頃までは一斤三十錢ので済んだのが此節では人真似にカメオだのピン何だのと巻た煙草を吸出し

て仕舞には南傳馬町の木村商店のが一番能いなんぞと奢り出して店の煙草益へ吹殻の林を捲へる夫も好なら仕方がないとしてお前さんが取んが
ないから吹殻を落して其處らだらけが焼焦だらけ斯う羽織の領先を裏へ
通して焦しては情ない療治が協はないでは有ませんかマア一鉢お前さん
は私の苦心を察しずに着類をソソザイにお着なされるのが悪い店と奥どの
外に二人を學校へやる世話其中で間を見い／＼する仕事羽織一枚だとして
仇や疎で出来ますか夫も仕立屋へやれと仰有るが堅い所を見付ないと假
令裁てヤツても縫込を取る慾ばかりでなく左様しないと裁縫の掛が行か
ないから後で困る事に構はずにヤツつけにします夫だから裁縫屋で習ッ
た仕事はよくないと私なんぞも家で稽古をしましたお君は學校に裁縫科
があるから能うございませすが夫でも針手は親に似るとか申しますから間
があれは傍へ引付て針を運ばせて見ます其度にオヤまた父様の縫直しと
呆れられるのはナンボ我子だとして耻しいとは思ひなさらなにか焼焦ば

かりか他所へ出さへすれば酒染に前を下前にしない着類は一枚もありま
せん女房の丹精を少しは思つて下さるなら夫は成程膝へ手拭を當て居
るのも物惜さうで見つともよく有ますまいが膝前が染光りになつて居る
より増でせう衣類の裾はクチャ／＼になる羽織の裾はまくれるチャンと
重なるやうに縫てあるものを着やうが悪いから立襦が揃はず人が見れば
ヤツバリ私が手づゝのやうに耻を掻きます子供が獨で着てもお前さんの
やうに背中へ皺は寄せません男も女も衣紋付と云て着こなし方でチャン
とよく見えて器量も上るものですお前さんのやうに下前下りにだらしな
く行も合々に着て居ると裁縫榮がないのみか如何にもグウタラベエに見
えて其處で直に人に付込れ阿房ごかしの馬鹿あしらいモウ／＼人間は
心よしと符牒を付けられたら往生です御覽なさい夫だから能い御役を銘
銘の様にして持切てござる御方達も佛蘭西へわ／＼御召を裁縫にやる
なんぞと大層それに骨を御折なさる夫は着物の工合が悪いため馬鹿げて

見えては大變だからです立派な方さへ其通りお前さんも着物だけでもシヤ
 シと着て羽織の領のまくじれないやうにして下さい馬士にも衣裳とやら
 髭があれば官員らしく毛が長ければ代言らしいと四五年前の流行唄にも
 あつたでは有ませんか衣類は着こなしといふのにダラシなく着た上焼焦
 と酒染といふ加之があつては三角な眼を八角にしたとて睨は利きません
 煙草をお腹なさいではない好なら詮方が有ませんがナニモ焼焦を拵へな
 ければ甘味がないと云ふ譯では有ますまい又焼焦を拵へなければ吸はれ
 ないといふものでも有ますまい

第九 古池やの蛙に水

其の熱心と根氣が家業の方にあつたら何様にか能うございませうに盡も
 屈託顔で店に坐つてお出なさるから御客も付端がなくつて買ふ物も聞か
 ずに行過ます何でも愛敬がなくてならぬうちにも店商ひする者はこれが

第二の資本とやら氣輕に眞實しく働らきを見せねば類は多いもの繁昌は
 致しません世辭もそらくしいのは却つて客の蝦蟇口を閉させるもので
 すがナンダまた買人が來をツたかヤレうるさやドツコイシヨと氣無精に
 して何で商ひが有りませう小賣店は客の入用の品をよく賣るばかりでな
 く入用でない品もツイ買ふやうに持て行かねばなりません俳諧とやら發
 句とやら風流がりなさる事と算盤持て子供を正客の此商賣とはトント掛
 合ぬ話まるで仙臺へ行く者が大阪行の涼車へ荷物を積んだやうなもので
 すイ、エ夫が行けません塚の生藥屋でも宗祇でも左様な事を何遍方人に
 擔ぎ出しても私は吞込ません家業は家業風流は風流ナンテ貴方に左様な
 確然とした事が出來ますか夜も枕元へ硯箱を引き寄せて左も大層な事を
 考へたやうにお香燈行を最少し寄せて呉れ夫ほどの寒さでもないが油が
 悪いかして兎角凍ッへならぬ杯と掻立てさせて何を書くかと思へば我膝と
 談合をする霜夜哉とは何の事です夫でも夜通し寐ずになら盜賊用心にも

なるが十二時頃から腎肝の時分には筆を抛り出して大駭き却つて遅く眠るだけ寝こくつて此間も便所の開きが明きましたよと揺り起しても如何しても起なさらず其うち小太郎が起て小便といふので其勢ひで私が見廻に参ました一昨日も仁平さんと店で何か興に入て話して居なされる様子であつたが急に角田真平の横腹を穿ると大きな聲キヨツとして近頃いけもせぬくせに人の選挙を頭痛にして忙しい間を缺いてお出だから若しや其熱が高じて又誰かに煽られてヒョんな事でもなさりはせぬか其でないにしろ此節柄どんな間違にならうも知れぬと髪が思はず締るほどに氣を揉み今の話しは何でございませと聞くとなニ竹冷宗匠の風星といふところを狙つて一番大景物をせしめるのだ彼人の事だからマサか天の君は状袋十五客へは端書二枚の叩き放してもあるまい大かた三才は縮緬一疋づゝぐらゐのはづみは有らう取たらお前とお君のとは呆れました子夫其通り家業と風流は別だと云ながら其の愁心お前さんのやうな愁張の風流

がりがあるから大景物の金をやるのと欺して入花を取逃の發句會が眞晝間麗々と諸方に有るのであります仁平さんも四十面を下げながら人柄も忘れて如何も頭の五文字が坐らない桃咲やと仕やうか驚やと替やうかとは能い氣なものだ貴方もせめて彼の冗を考へる隙で毀れ物を繕ふ膠細工でもなさるか色の種めた品を塗直しても爲て下されば餘程廢りがなくありますものホニ芭蕉とやらいふとんだ人が出て古池へ飛び込んだ妄念今に浮かばぬか世間の人を何萬人か能い馬鹿にするとは怖い事だ嗚呼いろくゝな布令が澤山出る中だから下手な發句を致すに於ては罰金として入花の十倍を取立るものなりと殿しい御法度も有りさうなものだ

第十 床離れは四時春眠

朝起は三文の徳とはよくは云たが相場が安過ます商人の店付は飾り様にありませすが朝疾く掃除がよく行届いて居るのが一番見よい福の神は昔

朝起氣に協ふところを覗いて見て神棚の燈明の光消きに寄り玉ふとか他
 で六時に起れば此方も六時と肩を揃へて居た丈では扱て繁昌は致しませ
 ん況て六時で御座いますよと催促三度も四度にも及んで先づ一服と寝な
 がら煙草これでは入り掛つた福の神も煙たいので逃出させませう貴方が夫
 だから随つて子供が朝が遅く起ると學校へ行くど追駈競ツイ手が廻らず
 に御辨當へ御膳を入れることを忘れるやうな憫然な事も出来ませ私わたくしの祖父
 様にあたる方は朝は必らず日輪様がお上りなさる前に起て嗽手水をなさ
 り戸外の掃除だけは人も多くも使なさるが御自身なすつて落して居る紙屑
 釘の折も棄ずに取り置きそれを溜て賣々なすつたが集つて御病氣の時御
 遺言と共に皆にお示しなさつたが二十三兩餘あつた其外に錢の落して居た
 を取て置いて神佛へ納めたも少ない高でなかつたのと斯うして人をあ
 使ひなさつたので手足のやうに皆働いたと云ます幸ひだか不仕合だか家
 では人と云て小女一人の外は用はないから其行状にも及びますまいが朝

だけは世話を焼かせずに起て店の掃除だけチャンとして夫から一服なり
 二服なりなさつて新聞も配達して来るのを待つやうになさい格子の間へ
 差込で行たのを寝惚眼に見そこなつて戸袋の中へ突込んで仕舞今日はナ
 せ新聞が遅いまた流行物の發行停止かオヤ向ふの家では讀で居るやうだ
 借は配達め横着でと怒つた晩に戸を閉るとて夫を見付ホイ此方が悪かつ
 たそれでは此前新聞のなかつたも奪られたではなく矢張戸袋の中かと燈
 で穴を覗いて見る其日に限つて親類の近所に火事があつて見舞状も出し
 後れとなる杯は皆朝寝の御褒美です因果な事には煙草がまだ嗽もなさら
 ぬ其口へ寝ながら吸るが甘いとは如何でも灰吹の煙とは反對にウダツは
 上らぬものと見えます強い方は毎朝起ると直に水で身軀を拭くとさへ云
 ふに能い加起るが衣類が暖まつて居るかとは何事ですそれも男の高下と
 思ひハイ／＼と其通りにすれば夫でもまだ床離れが悪く小太郎が起る端
 になつてサア起る／＼と急にち騒ぎなさる忙て炬燵へ掛替ると小太郎も

また飛起て衣類が冷たいから着替ないと一旦威勢よく脱だ衣類をまた引掛てうづくまつて居るうち風邪をひいて彼から今にサツパリえません風邪は病の始やさしいやうでむづかしい彼で餘病を引起せばどんな悲しい目を見やうも知れません可愛い子供に風をひかせ女房に苦をかけ夫でも朝寝が仕たいのですか夫も一時二時寝られるにこそ僅三十分か二十分を起借みをして家中の手順を狂はせ餘計な用を拵へて下さる……朝は先づ一日の事を考へると能い遁辭を何處で覺えてお出だか……一日の事どころか古池やの元をなさる暇には百年の先も考へて置かれますそれでまだ仰有る事が能いどうせ何處で讀んでも入る間は同じだから新聞だけは寢床で見事にしたいと左様な事で時間の切詰つた今の世に立行れますから前さんドゥセ朝寝をなさるのだもの眠がらずにマア考へて御覽なさい

第十一 大氣は損氣

外飾は無益だくと云口の下から貴方が詰らぬ外飾をなすつて私の領分へまで口出をなさるので年分には何程費があるか知れませんそれは隣向ふとも目張鏡で居る中ですから偶には魚屋の盤盪を下させるも仕方が有ませんが好い殿様顔をして直も聞かずに懐手で指圖をして後で咽喉へ刺を立てる程の思をしたのは幾度だか。魚屋の方でさへ小勢と思へば片身置て参りませうと云のに願を前へ出しなすつて鮓や鮫は仕方がないが如何も魚は尾頭の名所が揃つてなくては甘くない様だ一枚買ふオイ丁寧にコケを引いて呉んな杯と魚屋への外飾に六十五錢の鯛モシお前さん商人が算盤に相談しないで金を出して何で行立ます一寸した事でも私が直切て馬鹿の剃身を水を絞つて一揃ひ幾許と買掛て居るとチヨロリと口を出して夫は本場か色氣が能い左様だらう青柳だらう堀江猫實ではまだ左様

育つまい盤盞一杯買ふから安くして置け此の貝柱はさぞ能かつたらうに左様か最う賣て仕舞たか彼處の隠居は食物は賤しい夫だけに所も見える左様だ水へ漬たのと一所にされて困るだらう貝の乾物も分らないで馬鹿の舌は赤きやア能いと思つて居る者に結句賣宜からうナニ多し事は無いサ乾して置けば此貝は格別に味の出る質だ軒へ吊下つて砂塗れになつた場違とは分が違ふヨシ／＼多くつても能い昔な置て行きな弾いて見せないでも貝の生死ぐらゐは知て居るサ能サ與方大きな并鉢でも出さつせいと何處のツケにか買人の方から註釋を付て云直よりも買上る者がありますか能い馬鹿とは眞個に此事だ買て見るとナニ生が能いが凄じい半分の白い水を出して臭味がするほど夫でもまだ自分掛り合合だから申へさして乾すだけもなされば能いが夫は私へかづけてそしてマア呆れます子翌日になるとまた馬鹿か如何も斯う腸を出して仕舞て空乾にしては頑くばかりあつて甘味がない何處ぞ遣る所があらば遣なさるが能

い前もまた子供達が喰はずば買ふ時に左様云たが能い黙つて鉢を出したから夫で己が買つたのだ夫にチビ／＼買のと盤盞毎とは直段が大變違ふから經濟を考へて負させたが前まで意地になつて嫌を云出し己ばかりに引受させては弱るとは何の事です彼時私が多過ると云たばかりか目顔で知らせても貴方は知らない顔先度も蜻蛉の時に茹足の切賣は己は否だと大層腹をお立たすつたからア、無益をなさると知ながら何ぞ工夫も有る事と貴方の顔を剃身屋の前へ立たのです安くとも入らぬ物の買置をするなどは商人の訓戒法かもマア腐り安い生物おまけに消化の悪いとて湯醫者から子供達は止られてある貝類それをマア聞覚えの通を云たいばかりに此方から向の口上を述べてやつて背負込むとは……左様して定めて剃身屋は夫こそ馬鹿ほどの舌を出してとんだ生意氣と笑つて居ませう貴方の様な人が有るから底は水の醤油を擔いで廻つたり中は生薪の詰つた炭を欺して歩く奴があるのですホンニ盞所へ出ていけもせぬ大氣ぶりは

此後吃度止て下さいよ

第十二 御宗旨違ひ

無頼者かお構ひなしか但しは私へからかひか前さんほどは宗旨の事を粗末にする人はない私の家は元から浄土宗ですが私が三歳のとき重い病に罹つたのを祖母さんか大層御心配なすつて百日法華とて宗旨を更へて堀の内のは祖母様へ願籠をなすつた其の御利益で私の病氣が癒つたので母様も夫から御祖母様を信仰で一代法華とあなりなされて御命日には毎月參詣を缺さず私も御祖母様の法蔭を忘れず法華の信者になりました母様もお前は御祖母様に助けて頂いたのだから御嫁に行くのも御宗旨の所にしろと仰有つた此方からお話のあつたとき宗旨を聞くと眞言宗オンアボキヤアでは御断り申すといふと富田屋の富兵衛さんが「御宗旨へやるぞく」に違が立ち」といふ川柳もある先様は代々眞言宗ではあるが至つ

て宗旨に凝がないゆゑ達て御經宗でなければと仰有るなら與太郎殿一代だけ改宗致させませうとのこと夫ほどまでに御望の事ならと此方へ參つて其當座は眞に貴方も優しくなすつて下すつたが二月三月經つと最う地金が出て改宗どころか御祖母様へ溢々一所に行きなすつて御開帳をしてと云へば心得たど坊さんの詰て居るところへ行て何か争つてお出なさるエ、もどかしい御祖母様の御開帳は五十銭と極つて居るのにも思ひながら跡から行て見れば御開帳料を半價に負けるとは何の事です何處の國にか御開帳料を直切る者があります私には彼時實に顔に火を焚きました坊さんが御信心の事に負引はござらぬと云へば全株祖師も諸人に見せるが爲に手をかけて後に像を裂したのだ夫を僧の身として意地悪くも信者に見せず鬱陶敷裂を垂れ置き見たいといふ者から錢を取て其帳を開くとは見世物の木戸錢同様だ見料を取て佛を見せよとヨモ經文に書てはあるまい廿五錢に負からずば見ないばかりと彼時に限つて青筋を立て大聲の論判

堂内に居る信心者は皆な呆れてお前さんの顔と私の顔を見競べて爪弾きを
 をして居ましたモウ、私は一生に彼様な耻を掻いた事はない私から坊
 さんに詫て御開帳を願ひ御祖師様にもよく詫申して歸りましたが、前
 さんは其耻を耻とも思ひなさないで坊主を商賣にする奴は悪く猪いも
 のだ、現在祖師だとか宗祖だとかいふ者を種にして戸帳を上げたり下した
 りして大まいな錢を取り錢を出さねば見せないとは何事だ、錢取坊主に欺
 されて御辭儀をして臍線を取られるとは成程女は愚なもので此賣僧共を
 驅り拂はなくては富國強兵思ひも寄らずとはマア何といふ罰當りな言でせ
 う外の事なら格別高祖日蓮大菩薩様や有難い坊さん達を誹られては夫と
 雖も佛敵ゆゑ其晩私は親里へ戻りましたが腹にはお君もあり母親も父親
 もいろく、仰有る御前さんも又富兵衛さんを以て以來坊さんの事を悪く
 も云ふまい御開帳料も直切るまい又約束の通り一代法華とならうとの事
 ヒヨんな事から一人の信者の殖えるも皆妙法の功力と立歸りましたが其

當座こそあれ今は法蓮華經の法とも云なさらぬ其罰は誰に報いませう
 子が可愛くば屹度心中からの信者になつて下さいませ、何でございます話
 の受答のかはりに御題目を唱へる者がありますか

第十三 下婢に厚く妻に薄し

内悪の外善の流義をお前さんは何處にても擔ぎ廻つて内の中でも他人に
 は左も同情が有り顔に一寸の事も彼も人の子樽拾ひだ勞はつて使ふが能
 いと使ふ爲に置いた者を遊ばせて私が不自由をします夫も下女の居ない
 時に仰有るなら能いが兎角好子になりたがつて此間も裏町の豆腐屋まで
 やらうとするとも用有りさうに呼止てコレ、此吹降に何處へ使に出す豆
 腐なら町内でも能いぢやアないか、惘然に此吹降に裏町まで行て見ろ向
 ひ風だからグツチヨリになつて仕舞ふ町内ので間に合せなさいと御聲掛
 りだ、只でさへ脹れ面が暖め直じの大福餅のやうにブツとして私の顔を左

も人使の悪いと云ねばかりに恨めしうに見るから私も胸が悪く夫なら
 腐など實の入らぬ汁ばかりを晝の膳へつけるも貴君もまた何處までも
 御心よしで下女をおかばひなさる此汁へ笑し麥が入れば眞物だと澄して
 七色唐辛子を振り掛けてお出なさるの彼で如何して私の云ふ通り
 は働ませう貴君の思召では下女を火鉢の前へ蒲團敷いて坐らせ私が禱
 がけで流し元を働らけば御十分なのでせう如何して今時の奉公人御膳の
 炊やうもろくに知らないで給金ばかり望み高いお米を自分の腹形を忘れ
 て播込んだ上に冷飯が残ればズン／＼井鉢へ明放し一日臺所の戸棚を改
 めなければ掃溜同様にしておまひます夫で動もするを此方の手支へを
 承知で代人も置かずに矢鱈眼を呉れです全で主人へ仇をする様なものだ
 左様いふ輩を使ふのに同情も軽い槍も有つたものでは有ません私が人使
 が悪いから年期を長く勤める者が無いと仰有るが貴方が御味方過るから
 思に狂れて却つて不足を云出し井戸端へ寄合ても何處其處では幾許の給

金の外に湯銭髪結銭は別に出るなんぞと欲だはしい事ばかり聞せ合ひ話
 し合つて尻の落付くものは有ません夫ばかりではない貴君は臺所へ口を出
 して菜は何だ是も下げてやれ彼も明日までは持つまいと其處に聞て居る
 所で御恩命が下るから彼奴が貴君の御膳にあるものを念がけて覗き込む
 では有ませんかまだ／＼其上に近ごろの女は高慢しやくれて貴顯紳士と
 かよく御手の付く事があると聞噂つてヒラシヤラと見悪い動作を致しま
 すイ、エ何も貴君に云ふのでは有ません夫ですが世間は斯うです彼も一
 端そんな氣があると見え湯から歸つて臺所の隅でゴソ／＼するから又八
 郎兵衛かど密と見ると朝子供達の御辨當にと思つて信助さんからよこし
 た鶏卵の折を開て一個破ると腐つて居ますのドゥセ彼人達によこすもの
 此様な物と外の能さうなのを見て昔怪しいから一個だけ買足して折
 をまた元の通りにして其腐を猫に遣れと彼に云付たのをゴソ／＼取て置
 いて夫をマアお前さん彼の凹凹だらけの顔へ塗ちらして居るのですいか

にあしやらくが爲たいと云て腐つた鶏卵を蛋黃ごと塗るとは眞にこれが
 キミが悪いといふのだ……其の腐り玉子の折を如何するなんぞと御心
 配なさいますな昨日佛七さんの所へ先日の御禮の印ばかりと口上を付て
 持たせてやりましたナアニ構ふものですか當節は腐つた者が随分流行ま
 すよ

第十四 折詰のかはりに酔漢のほ土産

槍持槍を使はずとかでも前さんも同情を只擔ぎ廻すばかりで一向家の者
 には察し心があるなりならぬ町内の交際だの友達の義理だのと名前目
 をいろ／＼にして能くお出かけなさるがつひに一度お土産もない私にな
 んで入りませう二人の子が寝るのを寝ずに父様は最うお歸りかと待つ心
 は可愛いでは有ませんか家で子供が待といふことを一寸でも思つたなら
 彼様便々と夜更しが出来るものでは有るまいに御酒で唇を濡した以上は

貴方は方角を失つてお仕舞なさと見える他所の人は皆慎莫がよくつて
 幾許酔ても咽喉に算盤珠のやうなものがあるからには迂闊な事は些もな
 い家へ來ても御覽なさい汁物や刺身ばかり手を付けて焼物などはソツク
 リ置いて餘り御鹽梅が能いから頂いて參つて家の者に悦ばせませう乍
 憚奥方御重を拜借などとよくしたら重箱ぐるめせしめる丁簡密々ちいぢ
 やアありませんか此間も孝兵衛さんが幹事丈に貴方の折をわざ／＼届さ
 せて下さつたが彼の通り何時でも土産の折は有るものを宴會の料理の著
 が付けられない乾すばかりかへつた鹹辛い鯛を毎日毎日焼き直してのセ
 ヒリ箸は随分貧乏くたいものさ近頃は隔を味操と間違へた藝妓が白晝横
 行して宴會と聞けば背負上を取て襟に掛ける覺悟で婆娑くさと立働くの
 で口取の上に埃が積るそれを有難く頂戴して食物通がるには驚くなんぞ
 と何處で覺えたか大きな事を云て外飾負で我分の折詰も置いて來るとは
 餘り當世に外れて居るでは有ませんか睡いを堪へ待て居る子供にソラお

土産と出してやつて御覽なさいとどんなに嬉しがりますか菓子果物の二つ三つも其中に籠つた場合は私までが子供に顔が廣い他所の人はわざ／＼買つても戻りますといけもしない外飾倒れに結構な料理の折を置いて来る夫ばかりか最う御免だと泥の機になつて居る友達を無理やりにかへ引張つて来て熱い奴で腹直しをやらう酒が悪いうへいつも爛冷しを只順ぐりに注いで廻られるのは詫まるい、サ下物はなくも酒は有らアなんぞと樽でも付けてあるやうな大束を極めて漸やく今ま子供を寐かしたければかりの所へ轉げ込んで来てサア酒を出せ爛を付ける燈が暗いの火が無いのと二十も三十も一所に用を云付なざる生憎子達に葛湯をしてヤツた跡で湯が少ない爛が遅いと御機嫌散々何か肴と云たとして現に御料理屋へ御出かけなのだもの家に支度がありませんものか酔つて居ても来た人は用心が能い自分の折詰を開かれてはと密と外套の下に隠してわざと酔つた風で鼻唄だ貴方折でもお持なされば夫を開いて又新しく御下物になりますものをと此

方から當て云てもマチマチと床の間を見て彼の三條公の字が肉筆でないとは驚く寫眞石版といふものなよく出来るものだど讀もしない癖に首を其方へ向て煙管で書く眞似をして居ます他所の人は是ほど抜かりは有りません其のマア御連込の時の私の迷惑……無い酒も有り顔に買にやると又彼女がウチ／＼して間は缺けるランプの眞を出し過ぎてホヤは破れる粉炭は急にホチるから跳て焼焦は出来る夫は／＼大躰の事では有ません同情といふもの些此等へ立かけてお貰ひ申したいものだ

第十五 筆不精

またお米が五合上りましたホラは覽なさい昨日葉書を出して下されば大きな店ですもの先の直でよこしますもの明日人形屋へやる手紙と一所に出さうと麻痺をきらすものだから此通りです頼まぬ用はよく持へるが頼む用は惜なさらぬ葉書や巻紙を出してさあ／＼とせがめば子供が灸を

すえるか臆病者が腹切刀を差付られたやうに膝を丸くして逡巡よし／＼
 今書くが三日も四日も續く其うちには証文の出し後れとなるのが多い一
 寸注文書も目端を利かせてマメに出せば品に切物もなく買過もせずにな
 づが一錢で埒が明きます客に品を開かれてお生憎様といふのは利益がな
 いばかりではない商人の耻といふものです昔ある荒物屋の店を夜中叩い
 て蠟燭を一挺呉れるといふと其處の嫁さんがハイと云て家で用ふのを取
 出して渡し幾許ですと聞くと廿四文と答へて其價を取つたを夫が見て此
 をよくお聞なさい其御亭主が見て其嫁さんに云たのですよ店を叩かれて
 其品がないは耻といふ事を知て家用のを直に賣た機轉は感心だが直段は
 如何して知たと云ますと嫁さんの云ふに一箱づゝお買になるゆゑ急に
 本幾許とは分りませんが何でも三十二文か廿八文ぐらゐ高く間違へては
 店の障り關に困る者があれば恵んでやる人もあると存じて安く廿四文と
 申しましたと答へるとは亭主は膝を打て感心し屹度是从から己の家で蠟燭

が賣れると急に翌日仕入て間違へた安い直で賣出してから終に大きな蠟
 燭問屋になつたと云ます「有る物を買に来たら賣らうと」覺根性で商人
 が行立ますか御賣を持って居れば能い物は他に取られます八方四方身軀を
 働らさせるかはりに一種二種でも葉書で注文したり問合せたりすれば自
 然と問屋向と親しくもなり仲間中にも多く評判が出ます百圓の取引も世
 間躰は千圓と思はせるが大事のところ問屋でも得意先でも下職でも御賣
 でも何がなれば扱からず手紙を出すそれが状差へ挿れて居てもいつ
 となく人の目に染みて廣告になります商人は此廣告が何より肝腎、何處
 町の何ハ、ア其様な家があつたかと云れて野立瀬はありませぬ昔の人が
 三年居黒めれば五人口は養されると云たも廣告の利目を云たのです今は
 新聞紙といふ能い器械は有ますが夫ばかりでは人も我も金を掛る人には
 協ひません其上にも工夫のうち郵便を精々利用するのが安くて益があり
 ます商賣の上許りか親類へ年始暑寒も早ければ葉書でも濟に向ふに先を

越されて切手を張て巻紙状袋の費それでも後れるだけが失禮らしい遠い親類どて何時用があるか知れず物の掛らぬ郵便で毎日春門までも来たやうに思はせて置くのが世渡り上手といふのです貴方も仰有ったでは有ませんか何某さんは平生よく手紙をよこして呉れるから今度の選舉に出して上たいと此が上手といふところです間際に迫つて料理屋へ呼廻るよりも其の平生の懇ぶりが利くものです夫には筆まめに手紙を書くに限ります一寸々々と合間にやれば手紙や葉書の二本三本何の造作もなさうなものだ世には高い紙に手習といふ冗替もするまだ夫より入花を付けて耻を搔く發句といふものを書散すは筆マメもありますよ

第十六 娘の曠着

着れば切れると云ふ事があるので貴方困りますよ彼を如何かしたらと仰有る其の彼が最う着られませんか又色の褪た昔形は私のを直したとて着せ

られもしません今までこそ冗などいふ事も有ましたが是から本裁ですから少し實味な物にすれば嫁入の支度の數ばかりか生涯も着られます今拵へてやるのは少しも冗にはなりません貴方もタツタ一人の娘では有ませんか些は奇麗な物でも引張せて見たいといふ御心が御出なさうなものだ夫は如才なく小裁物や大柄のものは下着や長縹袴と八天狗に働かせてあります他家では父は三度の物を減らしても流行の衣裳を着飾らせます夫が奢といふものだど仰有るが娘盛りは二度とありませんせめて貴方の御酒の半分も娘にかけて下されば悦ぶばかりか夫だけ品が残ります娘の愛情まで樽の中へ入れてお仕舞なさるとはホンニ如何いふ御心かお君の心にもなつて御覽なさい彼位の時分は衣物よりほか望も樂みもありません先月の廿五日にも先生の誘催しで龜井戸の天神様から梅屋敷へ行くどて昔は騒いで悦ぶ中でお君は齒が痛みますからと断つて来たとのこと自慢では有ませんが私も齒はよし母親さんもまだ一本も缺けぬくらゐお

君もそれに似て鬮齒もなければ痛む筈はないにどレも見せと云ますと
 イニ最う直りましたと逃げるやうにして何やら氣の重い様子私は強請れ
 るより尙辛く涙を胸へ呑込みました何故とは餘り情ない子供ですもの捕
 つて行くに行きたいは山々其處を自分で断るのには親に苦勞を掛けまい爲
 め幾許先生から着物などに構ふなど教があつても口まめ盛り十二三オ
 ヤ貴娘また其の衣類なんぞと云れては覽なさいどんなに辛いものか知れ
 ません夫を云へば親が心配すると娘ながらも彼の利發豪てやりたいにも
 泣てやりたいにも肝腎の貴方がナア子供のうちにはで持切つて着替る度
 に苦しい顔ですもの私一人が胸を断ますよ世間の親は他の娘が着飾るを見
 ては娘よりも尙けなりがるのに貴方は自身の娘の事ばかりか人様の美
 衣類着るのを見ても彼だから困ると世の中の苦勞を一人で脊負たやうに
 眉を皺めて風俗が華奢にばかりなつてよくないと大きな息を吐てお出な
 ざる餘計な世話と云て汽車の中で少しは早さが違うだらうと押して居る

よりは元な御世話だ世間の人々が何が目的で齷齪するといふに女は衣裝頭
 飾り男はまた妻や子に着せもし飾りもさせて其悦ぶのが見たいからです
 外の事の爲だなんと云のは皆間違つて居ます若しや私の直すのがなかつ
 たら貴方は大かた裸躰で置くでせうお君といふ名で思ひ出す雪降の中に
 袖袂は衣類を脱て子に着せませすそれは子も脱て着せませすが私が實家に居
 た時分見た芝居では親も脱て子に着せませましたハイ確に貴方の様に物覺の
 悪いのとは違ひます其の通り物覺が悪いくせに一昨年八丈は如何した
 どはよく覺えてお出だモシ貴方子供は一年増しに丈が高くなりませすモシ
 貴方着物は夫と同じに一年増しに伸は致しませんよ裾から切て参ります
 よ人間の着物は犬や猫の皮のやうに一で生涯は保ちませんモシ貴方…お
 君聞てお出か此通り親父は此機嫌よくお眠です嗚呼

第十七 一存にて事を決す

足の指先に眼は無いらすとはよくも仰有た出る度に酔拂ひ酔ふ度
 に下駄を違へて何といふ足癖の悪い事だらう夫だけでも能いくら他人
 に馬鹿がられます手間暇を缺いて毎日のやうに何の爲に出歩くのです錢
 の出ない御酒を飲倒すのが得といふ程でもありませんに……人の世
 話をするのは人の役だと立派な事は仰有るが夫なら人が此方の世話を身
 に掛けて心配しますか頼まれた以上は仕方が無いとは能いお諦めです夫
 で家の事を投やつて他外の事に息勢をお張なさるの……左様でござい
 ませうよ家の事は誰も頼人が有りませんからチエ……去年も此通りだ
 いけない事は分りきつて居るのに乗りかゝつた船だと冗にも騒ぎなすつ
 て能い恥を搔て加之に頼人は始丁寧であつたとは變つてお前達の働らき
 やうが悪いからだ云ないばかりです忠平さん杯は氣の毒な打られた上
 に貰つたばかりの時計も取れたでは有ませんか命がけてそんな馬鹿々々
 しい事に組合ふ者がありますかダカラ頼まれた時に其處で直に承知しな

いで一應妻とも談合致しましてと御歸りなさるが能い何が外聞が悪いの
 です夫婦ですもの何事も相談するのは當然だ引受けた事の仕舞も付かな
 いくせに一人飲込顔をして宜しい萬事は僕が心得たと煽に乗るから跡で
 二進も三進を動きません兎角貴方は一存で頼まれ事を引受るからいけな
 い成程夫は男同士の寄合分別なしの強がりたがりが高慢を比べる中與太
 郎様此は一番肌を脱いで下さいと下から上げられては並居る人の前否だ
 とは卑怯らしくて云へますまい跡で困ると知りながらも瘦我慢といふ魔
 がさして居て見れば宜しい心得たといふ外道の眞言を唱へたくなりませ
 う御尤な事です世間へ對しては女房といふものは全でないやうに一人受
 込んで見たいでせう而して困る段になつていろく厄介を其女房に掛
 るのは成程是は御尤の事です如何してく誰が何と云うと大勢の中で油
 を掛けられては是は燃出さずには居られませぬ御尤です實に貴方に無
 理はない併し此をよく御考へなさいませよ其頼人が真から貴方を力にし

てならばまだしもですが貴方が歸つた後では皆顔を見合せて斯う云ふに違ひない彼でまづ一人は片付た馬鹿も一役鹿末にはならない道具だと屹度斯云ます貴方ミスミス欺されても先に使はれると知れても口惜くはありませんか有志者と云へばとて情死した者の墓を立てやる者でも今は有志者と云ますよ……夫も貴方の道樂だからなされるも能いが家の事は十分手が廻つての上になさいマア積ても御覽なさい今までは此方を俗物がつて否に大面をして居た奴等が急に貴公の尊公のと氣耻しくもなく空笑して顔み廻る其心の中は用に一役使ふだけ用が濟めば元の俗物あしらひ見え透いて居るでは有ませんか頼まれる事を何でも引受るが豪氣といふものでは有ませんよ場合により前後を考へて否といふ一言を出すのが却つて了簡の逞しい立派な人ですよ何の事はない萬御引受所といふ看板を掛けなればかり左様して板挟みになつて死ななければかりに苦しんで出なされる以來僕が心得たといふことを篤と談合致しましてに屹度お替な

シ

第十八 酒 酒 酒

昔でさへ下戸と妖怪は無いと云ふ話があるに況て此節の宴會流行そこへまた解散とか選舉とか何に付ても酒屋の悦ぶ事ばかり生下戸も御愛想の御葉向酒唇へ猪口を付けくするうちにはいつか寝酒に五勺といふ仲間入飲興我飲と上達しヤケ酒と卒業するは是は御時節で仕方が無いが他の方は酔ても心締り何處にか用心の關所がありますお前さんののは只ダラシなく意氣地がなく分らない管を捲いて梯子を登るから仕様が有ません……何でございます最う止て呉れ……其御詞がお酒のとき八分か九分

で出ると能いが……
 童村曰く原作此段甚だ長く尤も理屈を捏ること禁酒會員の演説の如く酒不可飲の効能書の如し拙者もソコを眼目と存じ順をかへて第十八番

の終局とし一揮ひ揮ふ所存でありしところ一友人後より筆を持つ手を止めて曰く十八番といふところで酒の小言は天機を洩らすの虞あり世間の醉客貴公の云ふぐらゐの事は先刻承知でキメ込むのた野暮を云ず此等でオツモリとするが能い若し聞入りにスツバリ書いて其うちに僕の履歴に似寄りの件があれば只は濟さぬぞとサア斯ういふと可笑味が無いコレサ野暮に嘴を尖らせずに僕の意見に従ひ玉へと酒臭い氣を吹掛られて大に弱り此段これにて相済みすし次は婚姻論一篇を分ちなく翻案し説法の座は是にて終りと仕りし

第十九 契約の指輪は身を繋ぐ鎖

人の大禮のうち別けて尊く美しき此婚姻といふことも西洋にては何事も金づく、金の指輪の取交せに私し貴嬢を愛しますす杯と打付に好辭を並べ合ひ御寺の坊さんにもで厄介を掛けても其内心は互に財産の貫目ばかり、

亭主持なら虚弱な老年に限るなど令嬢といふものがカナリヤの囀る如き優しき口元よりの玉へば財産に富む後家を探して宴會廻りといふをする秀才もあり、左れば矢鱈と取替引替のならぬやうなむづかしい法律を立てたる國もありとかや、一遍結んだら離るゝことはならぬぞと屹度定ッて見ると自然に女權が強氣の弱い男は皆ヘンリー、ヨタロー杯と名乗るを得ざるの場合に陥る、或冷評家は結婚の式とする指輪をば後悔玉と名づけまた豚を繋ぐ鎖ともたへたり豚が鼻嵐でプク／＼と庭や畑を歩けども一寸此鎖を引張るれば否でも應でも引廻され果は厨房へ連行れ御料理にまで及ばるゝ、噫、肉眼で見れば極少い輪、第三指に簪られる爲に作られた其指輪も、眼を閉て關係の未まで思へば木星の輪の全星界を一周するよりは大きし、又曰く此指輪の其の圈圍は羅馬のサーカスにも似たりけりど、何故なりと尋ればサーカスの圈とは見物人の慰みの爲め猛獸を闘はせる場所なりとぞ、夫婦を獸の啗合とするは餘り酸過

たやうなれど傍へ退いて虚心平氣で見たらば随分その観でなくもあるまじ、女房の思わくの能いやうと外で金を借りて飾をするもあり御機嫌を損ねぬ爲め用をさし置いて御供して歩くもあり、職祿ともに棄んとしても權勢を失ふた憐な態を見せともなさに世間からはヤステ蚰の如くに云れても耳を潰てカヂリ付て居るもあり、輪の恐しき、牛の鼻輪も物かはなり、トハ云ふものゝ男女兩性あるうへは結び付ず世は渡られず、斯う胸氣にクナシ付けるも後の悔をあらせじと先づ驚かしあくものならんか、賊や若き男女には婚姻の二字ほど甘きはなく、又結婚後の男女には此二字ほど酸きはなしとか、六十年の豊凶を、豫じめ知る老農の、助言は親の有難さ、我邦にては幸ひに金づくといふクチな事まだ夫ほどに流行ねば、打付に愛しますの懸ますの云ぬだけで相愛敬して初めの悦びを末まで變へぬことは彼に勝りし美風あり、財産目的の否味なければお前の物だの吾の物だのと睨み合て争はず、一家は互の共同といふ其の

共同などといふ考へからして初よりなく只最う同躰同心にて、中睦じくといふの外は、知らぬ中こそ樂しけれ、これ此の帳中説法も其の西洋の影繪のみ、左は云ふものゝたま／＼には、窟よりも先に女房、といふ無法流もありて如何も妻がないと信用が付かぬの夫に絶りて此の計較をなご不埒な事より開化を見せひらかし損なふもあり、或ひは夫を思ふの餘り云こぢれてビードロ鏡のグシャと破れて水銀のはなれて元にかへらぬもあり、此お香殿の説法中チト大げさもあり自分勝手もあれど、それも夫を思ふの一念、我々與太郎黨たらんものは東西古今も大層なれどアレユレ思ひ考がへ合せ此の十八ヶ條の申し聞かせをよく／＼遵奉すべきものか

帳中説法終

輪柳

第一回

響庭篁村

我宿さへも今朝あたらしく、常聞なれし軒の雀の千代も殊更耳にとまり
 て、珍しく早起し、冷水四五桶勇ましく浴て、晴着に心の皺もなく、泰
 然として座につけば、昨夜は御身の爲また家の爲でござりますからと諫
 言まきつて少しうるみ聲になり御機嫌甚だ斜なりし妻女、天人の影向も
 かくやくとして、伊勢小笠原の躰方、手をつかへて懇懃なる給仕、我今
 にしてはじめて亭主の尊を知ると鷹揚にかまへて三組の盃取り上ぐれば
 さしこむ日の影も麗々と、障子にうつる鉢植の梅、今其處に書き出した
 るが如く、風は空に萬歳を唱ふるに似たり、平生は笑ふもニヤ／＼

かゲタ／＼なるを、此に至ると莞爾とうづ高くなり、奥方まことに目出
 たいな能い新年でござるオ、國も最う化粧が出来てか手廻しが早い心
 能いものだ早いと云へば最う禮者が見えたりやうであつたナニ一人で名刺
 を三枚置いて往かれた夫が結句便利で能いよサア奥方も先づ一つ過し玉
 へナニサ節の物を左様丁寧にならばとソノ物の始は足らざるがよしと云
 ふ事もある宜しい／＼國も早く雑煮を祝つて隣家の女中と羽根でも突く
 が能い……オ、左様か最う瓜を引揚めて庭の梅の苔を落したか……
 何處の子でも宜しい子供は左様窮屈に叱らぬが能い瓜が搦んで梅の苔を
 散すなどは自ら春の景物だテ目出たい／＼……盛り溢すとは縁起が能
 い吸物を盛そこねても客の前でないから能い奥方御氣色を損じ玉ふなヨ
 シ／＼烟も元日は温いが能いナニサ式正は冷酒サ平生熱烟をやるは彼は
 俗習だて宜しい／＼元朝の酒は格別に利く奥方少し祝ひ玉へ元日は少し
 櫻色といふが福々しくて能い……國も一杯やるか……留吉が来て待

て居る大層早かつた左様か車も新しくなつたか留吉も此へ呼んで一杯香
 ませ玉へサレバサ其處だよ其處で御座るテ車夫は車を挽く人自身は車に
 乗る人どもに世の營業だ人間に高下はない同座同席更に苦しからずだ、
 と寛大博愛自他平等、昨夜までは膳の居方が曲つたとして叱り、酒の烟が
 少し温しとて罵り、用が掛取ぬとて憤り、壺の塵一つにも睨み廻したる
 が、一晚の中に生れかはりし如くなるぞ目出たき、かゝる所へ同じ役所
 へ勤むる榎原三作といふ男、早や十二分の勢ひにて、大勝利號外々々ど
 呼はりながら飛び込みに、夫婦は驚き見かへる、間もなく、玄關の障子
 蹴破るごとくに引明けて、ペアと道外た顔を作りて手を突くに、夫婦
 は酒に咽て笑ひこけ、如何な事でもマア元日の朝から左様におふさげな
 すつてサ國や一寸御覽榎原さんの御顔を……ア、可笑いマア此方へ入
 ツしやいなと笑を堪へて挨拶すれば、三作はズツ澄し、一別以來柳田
 氏御健勝な軀を拜し横着至極に存じ奉つるだアレ悪酒頂戴とやらかせ、

と自分で猪口を拾ひ取るに、柳田の妻は徳利を取りて七分目ほど注げば、恨めしげに猪口の中と柳田の妻の顔を見競べて手を引かず、柳田は打笑ひ、悪口の罰は靦面だらうトキニ何處で左様にお目出たくなつたのだから、夜から飲明しか、と問ふとき戸外に頼まうといかめしき案内に、話を止めて聞耳立れば、柳田其輔殿とは此方か些御問合せ申したい儀があつて参つたと物々しきに夫婦は初々しく眉を擡めぬ

第二回

紛失した荷物がござつて夫が確に此方に参つて在る筈故搜索に参つた其の紛失の荷物と申すは榎原三作といふグズ酔でございアハ、如何です此方へノメリ込みましたらうと高く笑ふは瓜畑權平といふ氣樂者が作り聲して驚かしたるなり、榎原は憤然となり此奴が、初春早々人を荷物がるどは不届至極昨夜僕が彼の重圍の中から救ひ出さなんだら今ごろは安

待合の片隅に伊房になつてみすぼらしい様で居たのであらうと、やり返すを柳田は止め、能さお互に悪洒落ばかり巧むのでうるさくてならぬ瓜畑君先一献トキに今年にはではない去年と云てはまた餘り御疎遠過るが暮には御時節柄の事だから忘年会は廢ると一統が相談したに君達だけ抜驅にやつたのか、左ればサ忘年会など、我々はまだ忘れて能やうな年ではないから御多分に漏れず廢止としたが我邦二千五百年來はじめての此の光榮ある明治二十七年を忘れぬための記年会といふを我々愛國の有志者七八名で催したサ、それも一日なら能いが三十三十一と二日續き以下次の記年会とは何と盛なりと云ふべしだらう奥方の前では少し憚りありだが主公などは斯様お目出たき爲躰で家にばかりエヘン奥方柳眉を逆立玉ふべからず御盃盤所へ御引入で鴨鍋の御支度などは恐入る實にさ僕等千里獨行連はサエ瓜畑、左様々々春でも目出たがらなくては可笑くない既に榎原と連名で此の廣告を新聞紙に出さうとしたが彼の謹嚴なる課長

の叱責が怖いから出さず仕舞さソレテ前の文句は例の如しで御病氣に候は、伊勢病氣に見舞申奉りたく伊旅行は入浴等に候は、出先は報被下度何處までも兩人罷り出新年祝詞申上奉可い」さ兩人罷出が證文めいて可笑いでせう此勢ひだから昨夜兩人が相談して今朝から残らず驚かして廻るつもりを昨夜榎原氏が見えなくなつたので今朝三四軒探して歩いたのサ、ヤレ／＼困つた連中だぞ人を驚かして廻るより自分達の身軀が續くまいに、ソレ／＼君でさへ最う左様な後れをの玉ふ是だから一家を持と英氣銷磨といふ段取になるから歎かはいしい戰場に出るからは命たなきもの、イヨ我黨の志士壯なるかな、コレサ兩人で煽り合て左様騒いでは大變だ瓜畑君は眞の單身だから陽氣づくめも能いとして榎原氏は母親さんがお在ではないか最う締らなくてはなるまい課長も此間話があつた榎原は役には立が餘り輕躁で困る家内でも持たら今少し慎重になるであらうにと心有りげの様子で、モン柳田先生夫は實説ですか、ソレ直に乘

出した無益だよ引退いて我が手柄の程を見物し玉へ柳田の大人其次には僕の品評が出たでせう課長は何と云れました、冗を知れヤイ瓜畑權平、其處を拙者が、コレサ騒々しい獨身者は騒ぐものと極りもしまい芝山を見玉へ温順さを、何だ彼の因循な陰氣者あれは性の悪い肺病だらう、何狸さ寝入貉さ袋を被つて居る猫さ、先づ當世酒を呑ぬといふが不具の一さ、煙草の嫌ひとは交際場裏で煙たがられる筈だ、實に我々千里獨行黨の面汚した去年も一級上るだらう杯と沙汰をしたものはあつたが其事の無いは流石上役だ、彼を温順いと買被るとは世故に老いたる柳田君とも存じ申さず候以上だ、と叫に柳田額を撫で諸々人は善に與さぬものだ、

第三回

然らば我々を惡黨としたまふか、能い惡黨だと云れて無上の譽としたは昔の事だチ、御詞の忠臣藏大序も同じ元日から師直をキメラれては鹽谷

桃井の我々兩人呼出し前の人形身で面が上らないと云ふものだ、ソレ其通り口上茶番のニヂツク癖に騒々しいから話が間違ふ何も芝山の噂をし
たとして夫れで君達が悪黨になるといふ譯もあるまい、大有り／＼平生は
机を並べ合ふ同僚で水魚と迄は交らずとも目高と金魚ぐらゐの交際をし
て居るが彼の一段についてとなると實に仇敵も畜ならずさ先マア試に思
ひ給へ寶引の紐が三本あるうち一本引くより二本のうち一本引く方が心
頼みが強いでは有ませんか、然り／＼大に然りさ二本のうち一本引くよ
り一本を一人で引く方が誠にも尤も確で宜しいダカラ僕などは課長の令嬢
事件となつては此に居る自稱候補者の榎原三作などはガラ馬車に曳殺さ
るゝとて更に厭ふ所にあらずさ、コラ／＼無様千萬の事を申し出したな
併し斯云ふ拙者があつては逆も本望途がたしと身の程を知たが殊勝ゆゑ
過言の罪は許す／＼疑ふ者は慎るとは此の事だな僕などは技といふもの
があるから手自ら信じ入るも許す技といふもので往くから當欄は何萬本あ

らうと其を一束にしてエイト曳く力の程の頼もしさよ、夫なら何故芝山
を嫉む、夫は何だナ技は確だが其腕を芝山めが嫉にでも化て取て行つた
時には少し困るからさ、如何もよく饒舌る感心だ私の詞を二人で答めて
其の云開きを二人で仕て濟すとは誠に罪がなくつて能いソレ斯云つたら
能からう罪がなければ悪黨では無いから子、罪が無いなどは生有難いお
詞だ子罪が無いは些と若輩で甘味を持つ子ニ榎原、左様だよダカラ只今
頂いたのはお返却申して矢張先の悪黨の方をお貰ひ申して置くが宜い是
ぢやア如何か年玉を撰取に出されたやうだ奥方が何時の間にか現はれ玉
ひ置注の盛早といふのでトツチリとなつたうへ饒舌草臥たので何だか一
向分からなくなつたナント伊主人景氣よく是から三人で押出さうでは有
りませんか、左様々々今は三人でも出かけて二三軒廻れば七八人には塊
るだらう我黨が押出せば雪轉しと同じ格だ、兩君僕は大に感じる所あり
て今年からは大謹直酒も先づ三ク日だけで廢るつもりだ其證據には先づ

是を見て吳玉へ、ナニ大謹直へン大巾着でも小胴亂でも構ふものか禁酒も先づ三ヶ日なら先づ三ヶ年先づ三十ヶ年のものはある、近頃悟を開くといふ異なる事が流行するので大きに世の中が心細い併し夫も山師の會社騒ぎと同じで開くときは大業だがスーッと直また閉ぢてついで悟當たといふ囁を聞かない、悟あてれば命騒ぎさ先づ何にしろ悟の種といふ此品物を見やう、水晶軸の一卷でなくつて横綴の帳面中は何やら白紙の何か古いところでドリヤー一番開くべいか、水引の掛ッて居るところが古風だハハナ歌袋といふものか悟の種も歌や發句なら軽い葛根湯の二服も立付て飲めば直る、ナニ冷水の中へ出し抜に打込むが能い、夫では悟ではない唐痰だ、兩君見玉へ歌袋でも頭陀袋でも無いソラ、何だ金銀出入帳、オヤ、金銀出入帳、此の家に出來ては嗚呼といふより外なした、お鶴熱いのを持って來てそして何ぞ下物の趣向を

第四回

納まらない、ト斯云たら血を見ない青江下阪かなど、二百年も前の大古を交るだらうが、イヤ大古は交ない新米の水車搗へ霧を吹いて石灰を用ひて物を掻き廻したのを交る如何せ君の所は拂が怪しいから夫でも今まで用ひて居た南京米に増だらう、此奴が此奴が怪しかる事はかり並べるな元と鑿との區別もなしにノベツに饒舌て聲さへ高ければ勝つと思ひ人に負まいと洒落にもならぬ出鱈目を笑倒しといふ卑怯な軍法で擔ぎ出す貴公の様な者が多いので折角我黨の首領と崇める柳田君のごときも悟を開くなどいふ迷に陥るのだサア斯の如き妖怪ども、我輩一手で退治てしまふから柳田君最う一遍悟り直し玉へ火傷は火に灸つて癒り宿酔の酒で解く格で兎角悟の悟で直すが近道だ瓜畑君君も些能い言を云て傍氣色を清しめて呉れ玉へ何分如何も此處の主公に今悟られて、實に納ま

らない事があるのだ、僕も如才なく其處は尊慮を煩はして居るのだが迎
 も此處では里心が付いて居るからいかなる諫言忠告を用ひても齒を嚙し
 ばッて居るのに丸薬を飲せやうとするに同じだ兎も角も浄興を擔ぎ出さ
 う其の祭禮の名は悟り固め或ひはまた禁酒祭子ニ柳田君座が變るとまた
 氣も落付くものだ靜なところで緩りとヤッてそして君の浄述懐をも篤と
 承はッて成程といふ事になれば我々兩人も悟を開かうでの有ませんか悟
 も一人より三人の方が賑かで見榮が宜からうチモシ悪い事は浄勤め申さ
 ない巢鴨或ひは瀧の川あたりを運動の如何です、忌々しい人を氣違あし
 らひにして君達こそ本氣の沙汰でいながら酒より饒舌に逆上せて耳が
 グワン／＼するマア爛の能いのが來た口休めに二つ三つ重ね玉へ、サア
 瓜畑さんそれを乾しなさいましなオヤ榎原さん憚りさま一頂いて上げ
 ます代りに是から下戸になります宿をいぢめてのいけませんよ、解せた
 悟の根原の王妃にあり婦言つゝしんでこれ聴くべしか此の我が柳田君で

もない子、恨ッばい子何も僕が禁酒するからとて焼羊を以て諸君と相見
 えやうといふのでい先づ土臺を禁酒として酒席の付合も是まで通り
 さ、臺に用ひますものは禁酒か芋で逢ひしも昨日今日か何か物悲しく
 なッて酒も咽喉へ通らない、咽喉へ通らないばかりか鼻まで詰つて來る
 平生なら此で味噌汁を流し込んだら能からうとか何とか云ふのだが夫も
 出ない嗚呼柳田君が酒に離ると聞いたら伯母さんが亭主に死なれたとき
 に貫泣したより悲しい已なん／＼だ、豪儀に陰氣を云ふ子今日の勢ひよ
 く此で一日遊び玉へ今に誰か出て來るだらうから夫に僕が改宗するとい
 ふ其理由をも話すから聞て呉れ玉へこれも芝山の事に付て子年甲斐もな
 くやり損つたから自ら愧て其の規模としてといふのが近因で實は遠因の、
 大に悟る所ありでせう、芝山め戀の仇酒の敵と割書で二役ついたな、榎
 原氏戀の仇は大丈夫だよ君はまだ知るまい僕も彼奴の強敵と思つて居た
 とこる暮に課長の邸で賀越があつたとき芝山が彼の令嬢の浄怒に觸れた、

修怒に觸た畜生あやかりものめ、何を云ふ慣られたのが何があやかりものだ、驚てはいけな、ア、左様か動悸が少し鎮まつた、柳田は前に置し猪口を膳上へ片付ながら膝を進め、フム如何して慣られた子と問かけたり

第五回

左様躰を乗り出してフンと鼻から湯氣のやうな息を見せ膝前を直して僕らの面へチット目をつけて下さると話し出すのに酷く調子が乗て来るさすがに柳田君は話を聞くまでが甘い夫も其等凄じい學資で世間學をしたのだから、オイ瓜畑君の面へは僕だつてチット目をつけるよ先づザツト顔色のうちに近江八景のある額の出張つたところが比良の山大きな日が湖水空を向いた鼻付は叡山の塔かいつも眼がシヨボ／＼して居るは唐崎の夜雨の躰でございだ八景を算へ立ててもまだ夫で顔中に餘地があるとは借念の入た造作だ、伊覽なさいナントよく饒舌でいありませんか是でも

これをこしらへた両親があつてまかも育てるに手が掛つたのだから不思議だ寧ろ是なら十月の苦勞を二月ぐらゐにして口ばかり迫上ればよかつたのにホソに呆れる僕の修面相に近江八景があれば君の顔には松島三十六景が備つて居るへん顔中凹凸で地球儀にも似て居るこれを名づけて地球面と云つても能いくらゐだ、宜しく雙方の云分は分かつた互に道理なところがある好漢よく好漢を知ると其の理屈だシテ先づ話しかけた話しの、シテ先も凄じい雙方尤の所があるなど暗に僕を植原のヂヤミ面並に扱ふといふものだ是では話の先が折れて仕舞ふ、話の先は折れた方が能い先づ話し出さ前置の冗言ばかり多いのでいつも肝腎の用どころろの出幕にならず仕舞だ願はくは先を折つて尻尾を捨て中身のところをテキバキとヤツて頂きたい君などは國會議員といふものになれないから仕合せだが若しなつたら演壇へ上る度に突然簡短々々の御褒詞にあづかるだらう、イヤよく云て呉れた僕もすべての資格は具つて居るが悲い

な年が満三十には遙に間がある其時になると夫は凄じいよ先づ新に議員
 となつて初めの演説を處女演説といふ此人如何なる技倆かあると三百議
 員數百の傍聴者中に彼の令嬢も今日我親愛するところの人がいかなる名
 譽を得ると婦人席にありて瞳を凝してこれを見るさ諸新聞の傍聴筆記に
 も萬縁叢中紅一點などいふ又しても同じ文句でこれを形容しやうといふ騒
 ぎだトコロで僕が演壇に立ち先づ徐ろに、コラさ徐り徐る過るよ國會
 議員になる前に話かけた事だけ片付けては如何だ左もなければ僕は三四軒
 年禮を勤めて處女演説とやらが濟だ時分に歸つて来るよ、誤謬あやま茂
 山茂ければで兎角脇道へ迷ひこんでならない諸説例の令嬢一件、中入後
 の相馬事件か、黙つて、柳田君此男に猿轡でも箱て置いて下さい折角
 話の糸口を引出すと直に傍からこぐらからすから、よし、榎原君の方は
 僕が防ぐから君の釣込まれずにより玉へ諸説相馬事件は如何したホイ僕
 も釣こまれた夫から、暮に課長の邸で内宴のあつた時は君も榎原君も來

なかつた此方の者はわづか五六人あと七八人課長の友達でオンの内輪の
 事だから諸禮の見習の爲と令嬢と妹御と外に伊客中の人の娘達三四人で
 配膳されたが、彼時の正眞の病氣で行かなかつたが左様な事なら倒れる
 までも行くのであつたに嗚呼惜い事をした、芝山め何か調物を頼まれる
 とかで度々出入るので豪儀に芝山さんくど聲が掛るのよ夫さへ小癩な
 のに如何したのか令嬢が芝山の前へスーと膳を据えた、エ、エ、

第六回

一種令嬢癡癡ともいふべきものだ榎原氏氣をたしかにして靜に聞玉へ瓜
 畑君其日の羨方半分は令嬢方が配膳した事なら何も芝山の前へお冬さん
 が膳を出したとていぶかる仔細なからうに、有る大きに有ります貴方
 大山あります、氣味の悪い聲をするナ君も病づいて居る子、いさ、か其氣
 味のなきにしもあらず皆そこで異なる感じを發したといふの四五人膳

が廻るまで令嬢は外の品をお運びであつたが此時始めて膳を持って芝山の
 前へ置くど何が彼奴宴會馴れぬ山猿だものだから矢鱈無性に汚辭儀をし
 て恐れ入りますイエまづ〜と分らない妖怪でないか、化物なら
 宴會より年回に出るがよからう、交ッ返す事は巧者だが斯る場合に君な
 ら如何する、チャーンと令嬢の出し玉ふ膳を兩手に受け頂いて静に前へ
 置く子夫式の禮儀作法憚り様だが大雑書節用集といふ本の柳書にあるの
 を心得て居るのだ、是は近頃感心した夫程の學者とは思はなんだ是だか
 ら柳田君人は見かけによらないものですア、是は一番榎原君やられた
 子人は見かけによらないもの殿しい退治方だ是は頗ぶる鋭く来た、オ
 ヤ否に瓜畑の肩を持つて左も僕の敗北を心地よさそうにも笑ひなさる子
 宜しい其氣でも付合やさう、柳田君病人に構はずに其跡を聞玉へ此が最
 も眼目のところ劇通の詞をかりて云へば正念場ともいふべきところだか
 ら、折角榎原君を喰止た所ろだ冗なしに傍觀をせず其跡々々、ソコテ

此時令嬢が如何なる舉動に出しか試みに先づ中で汚覽なさい、否だね殿
 鑑遠からずだ人は見かけによらないものなど嬉しくないさ試なんぞ要な
 いからソコテ如何しましたも冬さんが何と云た子、冬子の曰くサ、たち
 きれないナ斯う瓜畑先生老人が生貝を合たやうにやらすと痒い所を湯で
 たでるやうに小氣味よく頼みます、ハテ夫は氣の毒なまだ僕は君のやう
 に汚い腫物などの覺がないから湯でたでるといふ快味を知らない残念だ
 が君の小氣味のよいといふ其の小氣味のよさ加減を知らない、榎原君ま
 た悪いダカラ黙ッて、柳田君がソ、ソ上げるので一人で有卦に入て居る
 僕をやりこめた氣だから可笑い是だから素人には只あしらッてばかりも
 置かれない、支那人が逃げながら云ふやうな事を云ふせ四百餘州皆な取
 られてもあしらつて居るのだらう、よし甘い喩方が甘いソコテ、よし甘
 い開方が甘いソコテ、ふざけると最う腕力だよ、誤ッたく其時令嬢少
 し眼を怒らし玉ひと斯う云ても榎原が憤つた時のやうに三角銀杏を噴潰

したる如くなるのではない。矯矐といふ一種の愛らしき矐がクルクルと動いたのだ。ア、口も手もむづ／＼するが爲方がない。此の大事の所らしい。夫から、大事の所らしいところか二號活字の場だ。號外に出して相場に影響があるといふところだ。何事も君がもつともソコア、斯う云たイヤ斯う仰有つた否ならあよしなさいよと其矐を取て次に居た宮地の前へ据直した芝山は手持不沙汰で只モヂ／＼さ、否ならあよしなさいよ至極能い。暗だ以來芝山の事を否ならあよしなさいよと呼う併し少し長いな夫だけ聞けば最う用いぬ瓜畑。伊茶でも飲むが能い。オヤ、柳田先生豪氣に考へ込んで白痴が大凶の傍簽を取たといふ矐だ、イヤ大凶でない大吉利だ。

第七回

オヤ／＼芝山が落第の話聞いて大吉兆と喜び玉ふところを見ると主公も

我黨非望家の一人であつたかハテ油断のならぬ奥方禁酒説などに瞞着されてツツカリ附紐を放してはいけませんよ、成程年を取ると三の慾のうち必ズ一つは甚だしくなる。種普通なのは飲食の慾でこれは子供にかへつたとも云て能い分度次は慾心が深くなるこれを死慾と名づけ次は色慾の増長するもので最う十年若ければなどといふ付上せで所謂六十の越破どか云て最も始末にならぬもの死慾と多く併發するが至つて難治の症で凡夫は大低此の三つのものを自惚と瘡毒の外に持て居ると醫學士が云れた。夫でも僕が云ふから嘘だらうといふなら確に醫學博士に聞いたまだ不安心なら碧眼のドクトルの訓だ。柳田君も悟つた／＼と看板ばかり立派に出して内心怪しい今の金銀出入帳から割出すと其野心なしとも云れぬ。嗚呼、まだ夫程の年でもないに惜しい男を一人殺した、エ、元日から縁起でもない。ナンダ芝山さんが出た噂をすれば影だ此方へも通し申せ。兩君其の勢ひで鏡舌つけてはいけないオ、芝山君御目出たう最う御禮の詞は濟んだ。

事に願ひませう丁度兩君も先刻から見えて今も噂の出たところさズツ
 此方へ左様一人々々にやらずとも事だ子此方は例の如く三人上戸とな
 つて居るのだから、と頻りに云れてムゾ〜と座につきしは二十五六の
 着白い男、辭退しながら屠蘇をチビ〜と飲み、手持無沙汰は額を撫て
 其手を袴の腰に入れ、カラカヒ半分の二人の話を、拵へた笑ひ顔で答應
 へし、桐の丸火鉢を摩りながら幅物と額を眺め、膳の上へ重詰物を取分
 けられる度に御辭儀をして居たりしが、思ひ出したやうに座蒲團を半分
 避けるを、柳田は慌て手にて押止めマア緩くりなさい今吸物が來ますと
 止めるに尙も座を下り、兩君も出を幸ひ此で御禮を述べますが私しも
 いろ〜是まで御世話になりましたが都合がございまして役所の方は暮
 限に辭職致しまして……此事は柳田さんへは前以て申上げねばなりま
 せんでしたるが御用仕舞の日に御聞届になりましたので……併し此後と
 も只今通り御引立を願ひます、と意外の事に柳田は元より、二人もさす

が氣の毒さに、夫はまた如何して子、と驚く許り慰さむる詞もなし、柳
 田は不審の眉を顰めつゝ、チエ芝山君の御都合で御辭職になつた譯で
 は有ませうが役所でも信任のある君が突然辭職は異様に感じられる何か
 不平でも御有りの上でか又は外に御榮轉でも云ふやうな事ですか兩君
 始め我輩も格別御懇意にしたものだから……有難う存じますイエ決
 して不平などと左様な事は聊かござりません榮轉はどても如何もアハ、
 母と共に一旦郷里へ参りまして其上でまた出て参ります積りで……い
 づれまた緩々御禮にも参上致します今日……皆様失禮でござりまし
 たいづれました……どヘタクタと御辭儀ばかりして辭して立をば止め
 兼ね柳田も不審の眉を其まゝながら開きて出る唐紙の引手に残る鏡鐸の
 透して見えぬ人心うつして渡る八橋の水も跡をば烏銅や赤銅魚子四分一
 も明かさぬ底を菊雁金建付重くとチハタと二人も立て送りけり

第八回

芝山が立歸りしあどには三人顔を見合せ、三人ひとしくまた俯向き、三人同じく顔を上げしが柳田はまた俯向たり、榎原は頭を掻きテ瓜畑辭職となつて見ると何だか氣の毒でならない何の事はない二人で酷め出したにわたるから、とさすがシヨゲるに瓜畑も額を撫で大きに其處のところがあつた夫だが是までトント其様子がなかつた如何にも急だネ随分へモゲた了簡の男だから何か此の主人並に悟るところ有りかも知れない不平らしい事などは些どもなかつた様子だもの、といふとき柳田は漸やう判断を付けたやうに火鉢を引寄せて其縁へ手をかざし、不平かナア不平らしい顔をしないだけが不平であつたか何しろ惜しい男だ不平といふものは多少誰にでも能ければ能いであるものだが夫で進退を決するやうな男ではないが兩君心配なさるな君方口でこそ毒も云ふが悪意のない事は

皆が知て居る全く芝山は一身上の都合があるのだらう母親と郷里へ還るだけの事であらうと鶴聞たか何にしる氣の毒のやうに思はれるのと、話しも少し濕るところへ乾いた聲で今一人安場悟一といふ男、ヤア二人ども此に居るね實に珍なる説を耳にしたよ實に怪しむべく驚くべく笑ふべく歎ずべき事を耳にしたよ實に新年に入りて尤も新たなる事を耳にしたよ、羅紗の古耳を君が寐巻帯にして居る事を疾に聞及んだが世情に迂濶な君が新しい耳とは是は實に新しい、ナアニ新しいと云て知れたものだゴム鞠に支那人の顔を畫いて賣るとは思付だらうものさ去年の春も飛田の家へ年始に行つて居ると此の當世男が飛び込んで来て大阪名代昆布巻やと賣て来るのは新しい賣聲が面白い彼が新しいと一人で新しがったので何が穿鑿家の飛田に卸されたこと卸されたこと獨身者の家の棚の達磨様で先づ彼の昆布巻の道具は砂糖入金ちやんの再出なること中身は餅で帯と衣裝は斯いふものを用ふまた呼聲も古く昆布賣といふ狂言がある

くらゐで面白く呼ぶは呼賣の當然だち前などは冬着の流行とか流行の何
 とやら楊弓塙か錦酒屋の姉さん好を聞囃りの言文一致を見て當世の鑿は
 此でケスと感心する類だといやハヤ輕石で腫を擦るが如くに擦られた夫
 から役所では君に昆布巻といふ尊號をたてまつた事も知らないでまた
 甘たるい事を新しがつて持出したのだらうよ、宜しい如何せ僕は昆布巻
 さ砂糖入金ちやんでも飴湯でも大きにお世話さ新しい珍説を教へてやら
 ないだけの事さ、憤り玉ふな飛田の高慢だつて五十年前の流行おくれを
 またお淡ひするだけだ錦繪で見た役者の話しさ君が運悪く彼奴に手頃な
 ものを持かけたから風呂敷を被せられたのだ君だつても偶には新しい事
 を耳にせまいものでもない遠慮なく云て見玉へ僕の前だどて怯るにも臆
 するにも及ぶまいサア云て見玉へ、へん尙安く扱ひ居るナ誰が君の前で
 臆す奴が有る只君の前では氣の弱い者があひへるばかりだ、感心敵なが
 ら甘く受た其調子なら少しは満足に出来るだらう物は試だ云て見玉へ、

へん木茸連中驚くまい芝山が素敵な事をやつた、芝山が何を、彼が女を
 拵へて是まで月給半額を注ぎ込んで居たのだ、オヤ如何な事て、御新
 造夫が實説だから珍でせう

第九回

吹くものも東風そよ／＼と來ると春めいて能いが底の見え透いた嘘は吹
 かれて面白くない、嘘………偽………フン………イヤ貴公等の智恵では
 成程僕の話は嘘と聞くだらう餘り高尙過て分らない分らないから口
 惜まされに是を嘘と名づけて耳を塞ぐのだらう左も有るべし若し少しで
 も僕の説が分かるなら今少し猿放れがして人間近くなつて居る筈だ、猿
 と人間の説は先づ春永として芝山が如何して左様な噂を立られましたな、
 噂………フン………風説………左もさうづ左も有なん我輩ですら初は左
 様も疑つたもの、一つ年を取たら少し智恵ついたと見えて豪儀に高慢に

なつた年は怖いものだ、年は怖いもの……フン……年は怖からうさ
 君などは高利貸の餌食になつて月の重なるを苦にばかりして居るから年
 は無かし怖からう月にさへ躍らせる胸た年には目を廻す筈だて、手が付
 けられなくなつた僕は此病人の看病は願下だ、芝山は彼通り母親に孝行
 で友達交際もしない者が月給半額を、ソノガ珍なるところ怪なるところ
 驚くべく歎ずべきなのです柳田君マア聞なさい實に不思議さ予此前後
 男が休暇を繰替へて一寸歸省した事が有ましたらう其時何處とか宿の飯
 屋に寄つて晝食をしたさうだ何が彼男の事だから迂闊千萬に暖味料理屋へ
 飛込んだのだから眞面目に晝食を頼んでも急に持て来ない何が彼男の事
 だからそれを待遠ともぢれつたいとも思はず縁の焦た火鉢の中を杉箸の
 燃さして丁寧掃除を始めた吹殻だの楊枝だの塵だのは燃して灰の塊り
 は押潰し炭に交つた石の碎は挟んで捨た兎角此頃は何事にも悪い事をす
 るもので炭も量目を増す爲に俵の中へ小石を交る炭の粉が付いて黒くな

るものだから出して見ても一寸分らないこれを炭團の添に幾許積んだ
 ツても起らない筈だ併し其等はまた罪の輕いうちで養生に飲む牛乳に米
 の磨汁を入れたり大事な兵士の食料に馬を牛にした雑詰などを納める輩
 から見れば大に怒すべしだが、モシ先生薪の中に牛蒡が入つた方は如何
 ぶ話が付きましましたナ、蒲蕪だと思つて鹽温石へ味噌を付けるなどは點に
 なりませんか、うるさいく夫から、斯して待つこと一時あまり首のち
 ぎれた鮎の煮浸しに酸ばい豆腐の汁、夫だけは君が啜り玉へ、黙つて夫
 から、随分箸が下しがたいものだが何が彼男の事だから澄して一膳掻込
 で左の手に箸を移し持ち右の手を伸して茶碗を給仕の女の目先へ出しな
 がら不圖見るとアラ怪しむべし、濕瘡を掻きながら欠伸をして居たのだ
 らう汚ないナ、酷く話が面白さうになつて来たハテ子怪い子夫から、柳
 田君左様水を向けた日にはどんな事を始めるか知れない此の亡者を浮か
 ばせるには、能よ夫から、其の給仕の女を見ると、エヘン、沈魚落雁閉

月羞花實に都に稀なる美人であるにアラ怪しむべし、ソラ来た、氣を丈
夫に、ハテチ、アラ怪しむべし海棠の雨に惱める風情とはこれか、
多分夫でござりませう、アラ怪しむべしだけは手前共で引受ますから何
分宜しく願ひます、静に聞玉へそして夫が如何しました、其美人が眼を
泣き腫して居る、眼の中へ埃が入ったのを氣短に擦るからいけない、石
混の炭だから跳たのだらうさ

第十回

何が彼男の事だから直に夫に感じた人間といふ事を酷く不思議がつて研
窮して居るとかいふ男だから大きに怪しんだ、何をアラ怪みましたナ、
能サ君達には話さない柳田君聞玉へ、鼻息で灰を吹立ること恰も雪中を
暴廻る野猪の如しと来た柳田君が水を向けるので虚の音ます、響き渡
るぜ、黙つて、何かチ夫では芝山が其の眼を泣腫して居る美人を見て

大に怪しんだ譯だ子、左様々々さすがに君は物分りが能い、人は見かけ
によらないものだらう、其美なるところの婦人も客に泣顔を見せまじと
俯向きながら首を捻つて、羽がひへ入れて板の間へ投げ出すとヨリが長
つて生かへつたらう如何して君の手際で生た鳥が拵へられるものか、柳
田君僕は最う話しは止ますナンノ小雀がと思ひながらも餘り騒々しい、
實に二人とも交返し方が激しい僕も芝山の事について少し考へもあるか
ら安場君の話の筋道がこぐらからアチ、さすが辯者へン否に煽るぜ子供か
らヨイ、になつた男が舌を噛んだ拍子に腮の掛金を外したとて此様な
のはなからう夫に高慢が交るから堪らない、マア兩君とも二三軒年禮に
廻つて來玉へ其内に緩くり話を聞くから、否に二人を他人あしらひにす
る子其跡で二人で面白い事をして遊ばれると思ふと少し愴氣が發る子、
面白い事をして遊ぶと云ても此二人なら脚コッコか備前摺鉢落して破れ

るぐらゐの事だが今までやり込められた遺恨晴しに屹度僕の悪口を云ふよ
 瓜畑といふ奴は否に男振が能くツて悪く氣が利いて居るとか何どか、何
 様も協はないも鶴も畑の能いのを早く持て来て兩君に酒樽を籍て呉れ安
 場君夫から子、何か彼男の事だから女の泣いて居るを怪しんだもの、泣
 顔を見たら極を悪がるだらうと傍を向いて最う能い時分と振かへると先
 刻から盆へ乗せて飯は鼻の先へ出て居る奴さ芝山も極り悪く夫を取て飯
 を掻込みながら汗を吸ひながらチヨイ〜と女の様子を見ると、其處ら
 へ何か出さうとござりますす子、コレサ、へい、此は實にアラ怪しむべし
 だ子、出ました〜、イヤ實に此は怪むべし其女が死を決して居る實
 に一命を捨てる覺悟の跡だから大きに怪しんで皿の肴を挟むつもりで箸を
 出したが心は膳の上にないから手は汗腕のところへ行て突ついたから忽
 ち溢れたオヤと芝山も心づく其の女もオヤと云つて顔を見合せ其の泣腫
 した眼でオホ、と笑つた此オホ、が芝山の胸へ染み渡つた子、ア、一言

云ひたい、叱々夫から、何が彼男の事だから心では思つてもムク〜と
 して口へ出ない只お前は如何したと斯尋ねてやる其詞が出ない此だて子
 詞は口から出ないけれども嗚呼氣の毒な事何が命を捨てるほどの切ない
 事があるぞと同情同感の精神といふものが芝山の顔に顯はれたから女の
 胸へもハッシとこたへて憂の涙保ちきれぬほどに迫つて俯向いたが膝の
 上には小笹の敷でホロ〜と溢れた子此だて詞はないが情が通じる銅で
 さへ人の思想を通じる元んや人と人だものはが平生冗口を饒舌續け人の
 詞の花を散して樂しむやうな多辯家にはないところだテ、イヨ感心、ハ
 テ子夫から

第十一回

人と云ふものは不思議なもので此で何としゃうと行詰つたときに突然と
 考へもなしに妙な考へが浮ぶもので彼ムク〜たる芝山が此時自分が云

ふともなくお前さん此の家の方かへと平生に似合ず手軽く女に聲をかけた左様すると其女は涙を飲み込んで、エと云ひながら膝前を直して少し後へ下る様にしたさうだソコ直にまた此土地の何方かエと聞ながら茶碗を出すとそのを盆にうけながら、エとまたモチ／＼と傍を向いて飯櫃の蓋を取らうとする、其處へまた出ますかな、酒に咽るまでも口を出したがるのは悪い病だ夫から、オット御膳ではないお茶であつたアハ、と芝山が取付たやふに笑ひながらお前何か鬱いで居るやうだが今此で待て居るうち何か大きな聲が聞えたが朋輩と喧嘩でもあしか遠くから此へ雇はれて来てお出なのかと茶碗の茶が溢れるも忘れて右の手で持たま、膝を鞠めて聞くと女は堪り兼ねてか咽かへる涙をかくしてツイと立たさうさ、ハテチ、柳田君能加減に聞玉へ自分が其處へ立會たやうに圖に乗て吹立る此鹽梅で行くとそろ／＼女の身振も仕兼ねないア、怖ない馬鹿もあつたものだ、瓜畑静に女がツイと立たは怪しむべしだア安場君夫

から、オヤ／＼とどう／＼横原まで捲き込まれたか此上は是非に及ばずだ酒を堪へ方にして聞てやらう、ヤレ夫で話も掛取るツイと立て如何した事、斯く深切に問ひかけるに答へもなくツイと立たに芝山も怪しんでお前何處へ行くのと聞いたさうさスルト女はクシ／＼と啜りあげた此處は福助の役だ子只始から終までクシ／＼啜りあげて可笑く頬端を脹らして舌をクル／＼と廻せば忽ち成駒屋とか何とかごまかせるのだが此女芝居氣なしに只目を擦りながらハイ、否な聲だな折角兩人が穩かになつたに君が左様乗地過ては太郎兵衛駕だ、は免々々これは少し話に實が入り過た地に福助のところがあるものだから兎角出たがつてならない借其女が答へるに、むづかしくなつて来た子、ハイ楊枝を取て参りますと、チヨッ畜生、芝山は忙しく夫を止めて曰くさ楊枝なら有るよ立すとも能い一河の流も他生の縁とやら話して役にも立まいが膝とも談合といふ事もある悲しい事も辛い事も人に話せば胸の晴る事もあるものだ苦の世界だもの

人間多少苦勞はあるよ私だッて思やられる事があるといつになく甘い言
を何處から取り出したか其女の頭から振りかけて、叱々、まだ何も申し
ません、云さうだから注意したのだ突然發口停止も氣の毒だから、ハイ
／＼恐れ入ります、諸自分は楊枝はあるよと云た詞があるからそれを偽
にせまいと探し始めた何が彼男の事だから異な形のついた縮緬の楊枝入
などはない全躰が其の楊枝入を入れやうといふ紙入から持たない男だか
ら俯向いて居る女の顔を覗き込むやうにしながら拾の袴をコキ始めた子
何が彼男の事だから今朝たしかに使つた楊枝を襟へさして置いたといふ
事をチャーンと記憶して居るから其心あたりのところを手で探つたがな
いハテといふかりながら漸々下へコキおろして見ると歩いた響に楊
枝はズリ落して襟先に至つて止まつてあつたオ、此に在りましたかと安心は
したが其楊枝が中中縫目から出ない、ヤレ／＼

第十一回

君たちは話の聞きやうを知らないといふものだ僕が斯う芝山の楊枝の事
を委しく説くについて何か冗を云て居るやうに榎原君などは天井を眺め
た跡で否に僕の方を見て冷笑の様子であつたが話と云ふ事に付いては順
序もありまた其場の様子もある只人の口から出る聲を我耳に入れた丈で
は事の真相眞情は分からない先マア君達にしても考へて見玉へ此の楊枝
を探すの瞬間に其女はいかに其心に思ふかまたいかに答へんとする其
場は染だらけの壘に焼焦も處々にあり分からぬ字をのたくらせた襖の次
の座敷には油臭い濕氣臭い夜具が積み上げてあつてキシつく廻り縁の突
當りは雪隠であるといふまで胸へ道具立を並べて置いて後に其の詞を聞
かなければ宛然其處に芝山と決死の美人とが相對したる當時の情は分り
ますまいオヨシカ話を聞きながら其時の状は斯もあつたかと下手なりに

も考へて呉れなくてはいけない此楊枝とて後に一の道具になるのだから
 此に少しく其來歴を説くのを、左様とは存じて居りました其の楊枝が道
 具になるのは其楊枝を額へかざすと姿が忽ち見えなくなるのでせう君も
 其術を御傳へたさうだ一つ此で奇術を現はしては如何です、モウ宜しい
 安場君夫から、娘は俯向いたまゝ色の褪た萌黄メレンスの前掛で涙を押
 へながらお話申すのも恥しうございませすが私は福島縣の者で外に親戚
 もなく母と只二人昨年東京へ出ましたが母の病氣に醫藥の料も嵩み一二
 年私が奉公してと存じまするうち世話をする人がありまして機場はたばたの工女
 の積りで此方へ参りますと前の約束と違ひまして工女ではない酌取女だ
 お客へ出ると殿しい事ばかり母の方へ手紙を出さうとしても中々使もさ
 せませず母から参ります手紙も見せません晝は斯う静でございませすが夜
 はなか／＼騒々しい此家外に朋輩も三人居りますが皆私を働らきがない
 といぢめますので此跡は涙がせぐり來るので志ばし詞が途切たさうさ

此時芝山は漸やく探り當た楊枝が縫目の横へ入つて出ないぢれたまさ
 れに縫目を劈いて折れたまゝ出して其まゝ火鉢へ投げ込むと共に溜息を
 吐いて世に不平の事もあるものだなと思はず云て燃る楊枝の煙に咽た
 子尤も此の千辛萬苦して襟の楊枝を假令折れたにせよ出たのを己が用ひ
 もせず直に火に燻べたを諸君は不審に思はれやうが元より楊枝は有るよ
 と美人の立を止めた丈で強て入用ではなかつたのだ夫を何が故にまた斯
 く探した後焼いたかといふと此が大に感ずべきところだ榎原君などは後
 學の爲によく聞て置きなさいハイ／＼などと白痴が馬を追ふやうな怠け
 た聲を出す者は是が分からう筈がない、地廻りのソ、リ節まで出かける
 恐れみ／＼、芝山は母と二人暮し母が芝山の衣服の洗ぎ洗ひもなさる
 子ヨシカ此楊枝が襟にあるまゝ若し母が捨だから全洗ひをなさるとき
 手を突擡いたら大變だらう手は下さねど我手に母へ疵を付けたやうな
 のだアラ勿体なしと孝行な者は斯の如く細かい所まで親を思ふ取も直さ

す今楊枝を焚いたる芝山の舉動は母の健康を損ずべき害物を取除いたと
も云ふべきものだ。榎原君如何だ此真似をなさい實に芝山は廿四に一を
増して廿五孝とも稱すべきものだ。嗚呼此孝子にして一婦人の爲に親への
養ひの幾分を缺くに至るとは實に歎すべきの極みなる哉。チーン南無阿彌

第十三回

柳田は話に聞染みて膝を進ませ。何か子夫で其女の畏へかゝつたのか子
如何も只真正直なものにも困る左様な事を一々真に聞て取上げた日には大
變だよしんば其女の云ふ事が實情にしろ十日もそれに染れば其事情と其
人とは全で別になるものだに、ソコダテ其處が芝山の大に慨歎して自ら
進んで蜘蛛の圓へかゝるところさ人間はもと無垢清浄であるに周圍の事情
といふもので濁し汚すから残念と頼まれもしないに切齒して世界中の人

間を一人で人形師へ跳へたやうに思つて居る男だ子、夫で其女は如何い
ふ手續きで脊負込んだ子、手續は話した通りさ何が左様いふ事になると
酷く熱心で釘板で拾ち倒すやうに掛合ふので雇主も不正な譯があるを見
え初め鼻梁を強く出たのに似ず到底前借を返したばかり僅少の食料を拂ふ
事になつて其女を引取て東京へ連れて來たさうだが借彼男がナンボ野氣で
も母親の前へ若い女を連れて出てこれを途中で拾つて來ましたとも云へな
いので其女を母の許へ渡し彼の中から五圓とか六圓とか送るのださうさ、
フム夫で分つた、何が分りました子、何さ芝山の舉動が此頃變つたと思
つたが其譯は燈臺下暗しで我輩はじめ左様な事には極めて鋭敏な兩君で
さへ知らないが何ですか役所中では随分評判になつて居るので有ますが、
随分評判……フム……随分評判になつて居る事をソノリと聞て新し
さうに話して廻る僕だと思召すのですか、ちれつたく否に筋ばいナ柳田君
最うこの男を相手にするのはお止なさい先刻から一時間も續けて鼻も動

かさず眼を内へ光らせて重ッく吐くから惜い夫を真にうけて
 柳田君とも云はれる者が眉へ笈書の壽の字のやうな皺を寄せてフソク
 と聞て居る事がありませんか楓原までが賢顔を作て尤もらしく聞かから可
 笑い、瓜畑君よく云て呉れた君達が嘘がつて呉れなくては僕の話に價直
 がないソレ下士道をきいて大に笑ふといふところだトキニ最う正午でせ
 う正午までには是非行くところが有る諸君中座失敬、否に氣取て来たナ何
 時でも酒の席になると手を持って引張出されるまでも猪口を放さないくせ
 に中座失敬とは何處で左様な詞を覺えて来た嘘の尻の破れるのが怖しい
 ので逃げるのだらう、妙に翔まッて喧嘩腰で来るヲ貧な山伏ぢやアある
 まいし法螺の尻が破れやうが錫杖の頭が取やうが頓着があるものか、コ
 レサ猫の戀にはまだ季が早いのがみ合ふべからず先づ熱いのを一杯、安
 場君その女を芝山が何處に隠まッて置きますテそして折々其處へ芝山が
 出かけるといふ譯なのですか女は内職にハンケチの端縫でもして居ると

いふのですか芝山も母親の機嫌を見て其事を打出し女房にしやうといふ
 のですか芝山の氣の能い所を付込んで踏臺にして其女の外へ外れるやう
 な事はないのですか、感心榎原君感心同じやうに並んで座るが此の伯
 父さんとは雪と墨だウ感心聞きやうが丁寧だ深切に教へてやりませう
 儒子教ふ可しとは君のやうな人の事だ古い流行詞だが若いに奇特などは
 君の事だ天明安永の頃にサンサ如才はござらぬエといふ噺子詞があつた
 が實に君は聞方が如才ない三作如才がござらぬエと諺つても能いくらゐ
 だ

第十四回

洒落の中へ人の名や苗字を入れるは失禮だと云ふ事だよ、地口も頭字が
 同じな冠と申して思げにござるが聞て呆れる、聞て驚いたのは芝山の
 飽事だ、聞て驚くと云へば今のは正午のやうだ大きに長座を致しました

いづれまた春永、何だ前口上だけで教へると云た事は、此で云ては口が
 多いいづれ役所で能い子だから君にばかり密と教へやう、いづれ春永に
 吹て廻るが能いとう、安場め吹まくつて行て仕舞った大風の後は實
 に此事だ柳田君許りでは擔がれるに片荷ずると思つたら榎原が片棒行た
 ので工合は能くなつた筈棒の量目を云へば天秤が中央から折れるだらう、
 君左様云たものでない安場だつて偶には眞個の事を云ふよ僕も思ひあた
 る事がある、私も思ひあたる事があるも鶴も前も聞たらうがアノ芝山が
 ノウ、眞に人は見かけに寄らないものですチエ、ホイ、飛んだ事が奥
 方にまで傳染した、アラいけません瓜畑さん私共の娘を左様な酷い目に
 逢はしては、ヤレ見付かつたかこれは失禮全躰猫といふものは犬と違つ
 て膳廻りや膝廻りへ來て小うるさいから子孫に僕は嫌ひだから或人に呪
 を聞いたのですが大は睡を替めさせると其人を吠ないし猫には煙草の脂
 が一番懲るといふので御寵愛のも三毛殿に一寸只今、酷いぢやアござり

ませんか三毛や早くも出モウあんな怖い人の傍へ行くのでは有ませんよ
 瓜畑さん覺えて入らッしやいよ、左様お恨では甚だ恐縮僕は今が始めて
 すが榎原などは度々やります暮に上つたときも海苔で釣り寄せて髯を二
 三本抜きましたゼイエ偽なら髯を勘定して御覽なさい一二本確に紛失し
 て居ませう、馬鹿らしい猫の髯の勘定が出来ますものかチ、エヘン誰君
 かの御鼻毛はよくお算へ遊ばすが、アレ憎い口でお出なさる事チ、夫で
 すが奥方も人にかづけて自分の荷を軽くするのでは有ませんが今歸つ
 た安場なんぞは悪い事を爲ますよ先づ斯う猫を膝へ乗せて斯う手で逆
 鼻面を擦でますと俗に猫の鼻面とさへ云ふ猫の身には大事などころ其處
 が乾くので一寸舌を出して替める其舌を一寸斯う指で摘むのです猫は驚
 いて引込ませやうとする拍手に自分で舌を噛んでニヤァッさ随分面白
 うございますから御退屈の時分やつて御覽なさい、宜うござりますよ猫
 の敵は貴方と極つて居ますよ、瓜畑君猫の噂は聞えが能い子正物の猫で

なくッては君の名と一所に引合に出る事はないから、左様さすニ朝途中
で友達に逢へば親の墓参りの歸りまでを遊興に行た風におど詞を濁し
て此で逢つたのは沙汰なじだよ坏と腰味にしてそれを名譽がるほどの世
の中だから、オヤ豪儀に實目になツたナ其處へ早く氣が付たは君もまだ
神佛に全く見放されたのでもない、トキニ如何だニ何方へか飛出さう主
公いよ、動かずば二人で出かけやう、僕も一所に行くよ兩君車なしな
ら僕も歩かうお鶴外套を、貴方今お汁も出来ます正午ですから昔さんも
御膳を、飯は廢さう兩君もやるまい、デモ貴方一膳上つていらッしやら
ないと御毒ですから、奥方も飯を毒消と心得てお出の位だからまだ此家
も禁酒は大丈夫だし、我黨大勝利、大勝利々々々

第十五回

サア此うちお前も晝飯を祝つてお仕舞と妻女は一息するところへ、能い

元日様だな最う出かけたかど聲も福々しく入り来るは柳田が父の権齋、
オヤは親父様マア御早くからサア此方へ御覽なさいまし此通り今まで皆
さんが入らしつて飲つたばかりで、オ、左様か片付ずとも能い春は膳だ
け引かへれば跡は其まゝで濟さそを一々出し入しては堪らぬ火鉢も是で
能い先づ明て目出たいハイ、御蔭でナまた若がへつたどの評判よアハ
ハ心はズンド子供になつて春が面白いイヤ今朝から大分押掛た事であら
う春は出かけるが能い居浸れて家で敵を引受ては家の者が堪らない此方
から押出す事さイヤ押出すと云へば軍が勝ので誠に目出たい己も最う身
軀がソク、するほど嬉しいイヤ誠に有難い事で己も長命をした御蔭で
此の勇ましいイヤ誠に開闢以來の御盛舉世界中へ旭の御旗を輝かす嬉し
い事を見聞する事が出来る生甲斐が有るとてまた今の御時節に生れ合せ
た者ほど結構な事はない學校の生徒までが勇ましい軍競だ實にナ何だか
己一人で勝たやうに號外の來る度に騒ぐので婆さんが笑ふ事よイヤ今十

年も若くんばと腕をさするよ己も元は二腰さした者だ格別に心が勇む
 トコロが婆さんが中々口が悪い今十年若くんばの詞は西南の時も聞たや
 うだ戦の度に十年づゝ若かつたら大變だと斯う云のた何を云ふ女童の知
 る事ではないと己も負ずに力むのよ併し最う七十だからナ實は強い所は
 酒ばかりさオ、目出たい、夫では先づ吉例に烟酒を頂かう何かエ晦日
 から掛けて中酒もないかオ、夫は能い、左様か、暮に來た時も
 左様に云ていあつたが今世の中へ出盛りの身で禁酒などは滅入氣すぎ
 る、夫よ其通りだ今の若い者は老人に成方が早過るお前にも云て置
 くが己等ほどの年になるとヤン交際だ付合だと暗雲に禮義ばるがうるさ
 く馬鹿々々しくなるが又是も全で捨て世の中へ脊を向て獨立別個になッ
 ても居られぬものでよく云ふ詞だが世の中は持つ持れつよのう、人
 の世話もせねばならぬ自分も他人に世話になつて居る、ソレ、夫
 よ其處もある世話になる時だけヘニコラ云て跡では横を向て通るもある

併しな是は話したがお前などは如才なく其道理も分つて有るが斯して其
 輔も役所でも用ひられて居るとヤレコレと云て來勝また不正な事でさへ
 なくば世話もし肝煎てもやるが能い眞更世界に犬のやうな者もないもの
 恩は忘れぬがいろ、夫には仔細もあつて遠々しくなるも有らうさ又此
 方でも夫を氣に持つは面白くないの成程貸たものは覺えて借たものは忘
 れる格ではあるがマア併し夫がよくなつて見れば矢張其輔の仕合で悪く
 ヲッて見なさい屹度また其輔の世話だお前がよく其處を捌いて行て呉れる
 から能いがホンニのう時によると腹も立ち小面も憎くなり最う是だから
 人の世話は出來ぬと諦めが付いて世の中をぞろ、手が引きたくなる事
 もある己も度々左様考へた併し又思へば夫は身分が困ぬからサテ如何
 したらと云ふ身になつて考へると左様いふ人許りでは世が渡れない……
 ソコダ實に慈悲をすれば何とやらで随分亂暴な奴もあるが……夫は先づ
 論外だてなオツト有る、烟の直る度に春が又來直したやうだての

第十六回

夫でございますが親父様アア聞いて下さい、エ主で先へ氣持を悪くした
 のではございませぬ杭瀬さんが餘りなので押詰つてから金を借りる證
 文へ名を貸せといふのを度々手懲がございませぬから夫だけは断ると申し
 ますと急に愛想つかしむ何時の割前も己が出した彼の出し合も己が餘計
 出したと古い事を並べて昔さんの居の前でさもく主で彼人に割でも喰
 せたりやうに云たさうですチエ親父様左様な事を云立にすれば此方にはど
 れほど有るか知れませぬ何時でも割を喰せられて居ますにチエ主でも其
 事を云返さうとは思つたさうですが大人氣ない必竟は此様な者と交際を
 するからだ夫に付ても酒は廢さう下手にして争ひが募れば能い恥辱した
 兎角人付合をすれば物云も多し夫も只一通りならば嫌な事も淺いがッ
 イ酒を呑むと我も人も後先の勘辨なく末の透らない男氣や後の括りの付

かないに大盡氣になつて飛んだ事を始め出す夫も此方ばかりの迷惑で濟
 めばまだしもだが定めて人様も其通りであらう酒の交際は何の事はない
 災ひを浴せかけ合ふやうなものだ夫もまだ若いうちなら能いが氣ばかり
 若くても年は分別盛り年下の人など、交際すれば其家の親や何かは知ら
 ない事までも引付て此方をよくは思ふまいフツ／＼付合は嫌だ夫だから
 先づ其道具の酒を断つと斯う申しましてチエ三日でも過たら眞に禁酒だ
 モウ己も年だから何時までウカ／＼しても居られないッて急に實目な
 ッたのです……夫ですから私も今急に貴君が左様なさると何だか御勤
 の方も角が立ますからマア其つもりで氣を締めて入らしッたらと申す
 の……トコロが親父様聞いて下さい最一つ氣にかけ出したのは輪田さん
 の御娘御ハ課長さんの彼方も御年ごろなので度々輪田の御夫婦から主
 へも御話しが有るさうです夫に今御勤地へ御出張になつてお出の御息
 からも主へ折々手紙の序には其事があるので何様か能い方へと思つて主

でも心配して居りますと輪田さんの方からお話しがあつて矢張御役所へ御勤の……親父様も御存じてせう芝山といふ人はと云ふ事になつたのでございませう一跡主では先から芝山さんが最負で誠に沈着た氣質の能い人だと褒ちぎつて居るのですから大層悦んで内々芝山さんの心を聞いて見ますとまだ左様な考へもござりませぬまた厄介をもとめる必要もまだございませぬとマア無地な返答であつたさうです夫から親御は彼様仰有つても肝腎の娘御がと其方を聞合せると御當人が芝山さんは嫌ひな様子だといふのですよ左様すると急に芝山さんの方からマア訝しいでは有まぬか先に答へた厄介の必要とやらが出来たと見えて若し私共でも來やうといふなら貰ひませうと云てお出なのですよ先に話すとき餘り主で乘氣であつたものですから今はいけないとも云れず困つて其場は素切な話もなくして後で如何して芝山さんが先には木で鼻を括るやうで有ながら急に彼様云て來たかナンボ若い者は氣が變り易いと云て餘りだとして左様

氣が變り易いやうでは性根も覺束ない己の眼鏡も曇つたかと云て考へて居りました矢先へ不圖聞込んだのは芝山さんに何か有ると云ふのですよオヤお國や何方からお出のやうだよ

第十七回

オヤ左様最う御歸りなの其御手札を一所に手札入へ入てお置……夫からマア御聞なさいませし主では氣も揉む一人焦もして或時また芝山さん他へ呼んで噂の様子を探るとニヤ／＼笑つて居るだけではあるが幾許か形跡とやらがあるらしいので愈々心配して居ましたのに今日御同僚の方のお話しでは芝山さんには確に女がありまた輪田の娘御も確に芝山さんをお嫌なさるといふ事なのです夫も是だけで濟ば能いのですが輪田さんは左様な事を御存じなく暮にも御手紙で至急其事を取極たいと云ておよこしなのです夫も只なら此仔細を云てお断り申せば能いのですが實は彼

の通りの主の氣性だものでございませうから双方能いと思ひ込んで課長さんには酷く受合て芝山も否はございませうとまで申したのださうですから今さら板挟みになつて……夫も一杯飲んだ景氣まかせに引受るからだと酒を恨んで……夫にまだ困つて居りますのは芝山さんの方から假令一旦は断つたにしろまだ其話が切れないうち男が口を開いて貰ひませうと云出たに此方がたゞろいで居るものですからナンボ無頓着な方でも極りが悪いと見えて……夫にはいろ／＼御同僚の影口もあるのでは芝山さんが御勤を退きたいと云出したので……既に先刻も出でいよ／＼御用納まりで辭職になつたといふ話なので……尤も其處に他の方も御出だものですから委しいお話もございませんでしたか……假令芝山さんに左様いふ事があつたにしろ……如何も己が話た事から左様なつてはと大層心配の御様子でハイ皆さんと一所に出かけは致しましたか……夫に……此様な事を元日から聞せ申しては濟ませんが暮に……

……私は杭瀬さんが意地を付たのだらうと思ひますが十月からの茶屋の拂ひを主の名で取によこしまして……私は其譯を云て返してやらうと思つたのでございませうが主では昔の顔に係る大した事でもないからとむざ／＼拂つてやつたのでございませう主では是も能い懲役だ禁酒大明神のお授といふものだなんラ笑つて居りますが實に御友達と云ても願ひしい方は少なく酷い事ばかりでございませうハイ芝山さんは何時ぞや此で御逢なすつたハイ彼方でございませうオヤ／＼貴方が夫を御存じオヤマア、己の直裏に居るよ話の様子は其女に違ひない己もチラリと芝山といふ人の來たのを見かけた其母親といふのは婆さんが湯屋での合口よ娘もまたに母親をよくするさうだ己はまだ其娘を見ずよ一向戸外へ出ないよとなしい假ださうだ何だか婆さんが聞て來た話では誠に薄命な母子ださうなが己は戦争の勝祝ひで一杯だから一向婆さんの話に耳を貸さない己はまた平生から女のツベエ口は嫌ひさあ前なんぞは昔の女とは教

育が違ふうへ發明だから……アハ、何の是が御歳玉なものか御歳玉はすばらしいのを婆さんが明日持て来るとよアハ、お國も楽しんで居るが能いなニカ其娘か今も云ふ通り己はまだ見ないが何でも御亭主は遠い國へ行てお出とかだ委しいのは明日婆さんに聞な、夫では彼の其女には御亭主がおりますの夫を知らずに芝山さんが欺されて居るのです、ナアニサ其亭主を知て居るので芝山といふ人がよく世話をするのださうだよ

第十八回

マア、不思議な芝山さんが如何して男のある人を、夫がサ婆さん同士の話だから行立は太分醇いが振摘んで云へば芝山の親御が大層世話になつた其人の後家と娘が零落して何處かの田舎に居たのを芝山が廻り合て連れて来てそれを買いで居るのださうと委しい事は婆さん、左様な間違の事から罪を酒に被せるとは注ぎ溢した膝ではないがとんだ濡衣とい

ふものだアハ、まだ悴も角があつてならぬお前にだから云ふが杭瀬とやらと中が悪くなつたといふも根を洗つて見ると互の疑惑からかも知れない彼時に己が出したの此時に我が出したのと自分々々ばかり覺えて先の痛を知らないのも若いうちは断金だとか刎頭だとか命がけで胸を開いての交際で能いが一家を持つての上は大きに工合が違ふお前は其處等の事をよく噛分てだから云ふが幾許真直な了簡の者でも身最良はあるもので此方ばかり行届いたやうでも手脱はある全然構はぬ三缺といふ連中には却つてイサクサは少ないなまじ行届き合ふだけ先方では少しの不行届も氣になる氣に掛合の果は氣まづくなる彼程にしたものをと先づ女房同士が火を摺る夫が忽ちでもないが漸々に亭主へ燃付てのお前に云ふのではない只話だよ夫だから昔は御留守居勘定と云て其座で直に出し合て事を濟した併し酒の上で君だとか僕だとか臂を把り肩をたゝいた跡で二一天作を持ち出すのは餘り殺風景だ奥が醒るといふものだての此だて此をよく

考へて大勢の宴會なら會費を出す分ゆる行くとして一人二人の事は家で
 呼び呼れするやうに心掛たい親しさも外飾なく親しくなつてよし併し此
 だて兎角女房がお前のやうによくこなれて夫の半分樂屋で働らく眞の内
 助となつて呉れないでエ、面倒など否な顔を見せるものでソコでヤツサ
 モツサが兎角あるて併しこれも世辭過て待合とか寄合所とかいふやうに
 なつても困るすべて世の中加減ものだての併し眞輔も觸出しは禁酒ぐら
 んで恰度よからうアハ、斯うは云ふものゝ己なんぞは失策だらけであ
 つたよ今でも矢張失策勝よソラ云ふ下から此通りだ折角の汗を勿体ない
 旦那様のち歸りと女中の知らせ、オ、恰度よくと立上りて入口に出迎へ
 ば、柳田眞輔は勢ひの能い笑顔小脇に幅物箱の包のやうなものを抱へ車
 を下りるもヒョロつく足元、親父様が入しつてと皆まで聞かず、左様か
 目出たい何ぞ御馳走を何でもドツサリ御馳走を、御馳走は最うしたゝか

ヤツて居るところよ何だ禁酒固めと見えて大分陽氣だな、と子の機嫌よ
 きを我顔へ寫して笑ふ、親はいつまでも子を子供、眞輔は先づ御目出た
 うとベツタリ坐り、お鶴や急に忙しくなつて来たお前に一寸行て貰ひた
 い所がある賊に思つたより譯はなかつた何だ白湯かまだ酔はしないよ熱
 いのを一杯親父さんが入らしつたのに子が湯を飲んで相濟まないイヤ
 所が相濟んだといふ譯だ親父さん聞て下さいお鶴やお前もよく聞て子其
 事を使に行て貰ふのだイヤ使と申しては甚だ失禮拙者名代として御出の
 程が願はしい何だ内でも親父さんから能い事を聞た能い事には極つて居
 るサ

第十九回

眞輔は大事に抱へて來たりし包を解き箱の中より拵付の刀を取り出し、
 親父さん此鏢御存じでせう、と差出せば如何々々先づ眼鏡を出してナ久

しく斯ういふものを見ないから忘れたらうよと刀を取上げ、ッ、知て居る知て居るとも此鑄は昔己が槍蔭といふ男にヤツた信家の作だ己は鑄を集めるのが好で其中でも是は秘藏であつたが友人の槍蔭といふのが此紋が槍の葉のやうだ苗字に因があるから譲つて呉れと常々懇望されたが中譲り惜しんで居たトコロが彼の戦争騒ぎ槍蔭も軍に出るといふ別期に此鑄を贈つたが其後は四方に分散便も聞かず三十年近く其人の事は忘れたが此鑄の事は思ひ出した事もある是が如何して手に入れた賊に今思へば夢のやうだよくも前知て居たの、と故き友に逢ひたるほどに鑄を見つめて居るを見て、長輔は膝を進め、縁といふものは何處に如何引いて居るか分りませんナ今日課長の輪田氏へ禮に行きますと丁度能いお前の處に大層鑄が有るさうだ好で集める程だから鑑定をして呉れ今芝山が来て置いて行たのだと云れますから親父が好で集めはしましたか今は一向用のないもの私は鑑定どころでは御座いませんと云うち出して見せますから

不圖見ますと子供心にも覺えて居た家の品ゆゑ是は不思議見覺えがありませす如何して芝山が持て参りましたと聞きますと是は芝山が昔世話になつた人の後家が持て居る刀だが今度芝山が戦地へ行くについては護身の爲と刀を贈れたが洋刀仕立にするに鑄は入らないが此鑄は左る人から貰つた名作のものだからとの事で其まゝ芝山が貰つて來たのだとの話其の人はと聞くと槍蔭といふので子耳に残つた昔の事を思ひ出し貴方に御目に掛ませうと持て來ましたと鶴まだ不思議なのは芝山が女を圍つて置く噂を立られたのは其の槍蔭の後家の事で槍蔭といふ人が死んだ後娘に鑄を取たところ南米國へ出稼ぎに行たまゝ三年越便がないので母子は困つてすでに娘は田舎茶屋へ奉公に出た其時分芝山が邂逅て昔芝山の親が世話になつた人と分り其處から連れ歸つて細々ながら母子を一所に養つて其鑄の歸國を待つので其母子とも堅氣なり芝山も決して左様な弱行ひはないさうさ只芝山が彼襟いふ男だものだから何を人に云れても辯解な

んぞは爲す今に分る事だとトノト氣に掛けないで彼の通ニヤ／＼として居るので己まで疑惑をした譯さ……夫で左様分かつて見れば何も故障なし芝山も役所では足を伸す所もないから占領地へ出張して一器置見はすつもりですべては輪田さんの周旋で事の歩も行き近々出張するので檜蔭から大事な刀も贈つたのださうだ何と母の明くときにはサラリとするものだ全で下水の先に支へた物があつたのを取除いたやうなものだ是で己も禁酒に及ばずさ夫でも前に行つて貰ふ用と云ふのは芝山が今日にも明日にも出張となるに付て其前に婚禮を済めたいといふのだ事が急だはナ其早急なのもまた目出たい此方が仲人だから其打合せに芝山の家へ行て母親とよく相談をして來て呉れ何にする當人の芝山が全で其事は子供だから骨折は一倍だナニ誰と婚禮するお前如何したのだ分り切てゐるではないかチエ親父さん是ほど委しく話すに、左様云なさん己にも分らないもの

第二十四回

輪田さんの娘御と婚禮するに極つて居るではないか外の者と婚禮されてたまるものか、チエ娘御が進みなさらない御様子先程も話のあつたやうに人の居る前でいつになくツカ／＼お怒なさるやうでは、夫が極目出たいところよ己は先刻其話を聞いて皆は此縁談成就するなど悦こんだ何故ならば臍を手づから供へてそれを辭儀したとてムツとして見せるのは下心に十分何だチエ親父さんの前で此様な事を云ては如何はしいが相慕ふ底心があるからだチエ親父さん、ウソ左様だ其處もあらうてな夫は何より目出たい事だ併し左様早急では因るだらう己は手傳の役にも立まい婆さん直によこさう何にしる目出たくて能い、と立上るとき表に案内、オヤ芝山さんが、サ、此方へと請じられても平然の通り、また御年始に出ました是は／＼親父様でござりまするか御目に掛りましてもツイ粗忽かし

いので失禮計り致します御免下さいまし今輪田さんへ参つて居りますと
 宅から車で迎が来ましたから急ぎ歸つて見ますと久しく南米國の方へ参
 つて居て沙汰のなかつた縁家の者が此の五日に着く船で歸國するといふ
 電信が方々廻つて着きましたので私も一肩休まる事母はじめ縁家の者は
 ハイよく御存じで其の槍蔭母子は餘り嬉しいのでウロウロして戸外へ出
 たり入りたり其方の空を見て歸るのを今から待程今引返して輪田さんへ参
 りましたら此方へ出て何角の事をよく指圖をうけるとの事で参りまし
 た如何も誠に合した事のないもので何分よろしく願ひますと額
 の汗を拭拭ふ、柳田夫婦は手を擧て煽がねばかり、ドゥも目出たい三方
 四方目出たい夫に縁は不思議では有ませんかよく話を聞きますと此
 の刀の鑄は父が槍蔭さんへ差上げた品です槍蔭さんとは藩は違ひましたも
 極知己であつたので戦争の時分も時事について傍同感の事が多く此鑄も
 其折と譲りやしたのでそれがまた貴方の手へ廻るとは實に不思議重ね々

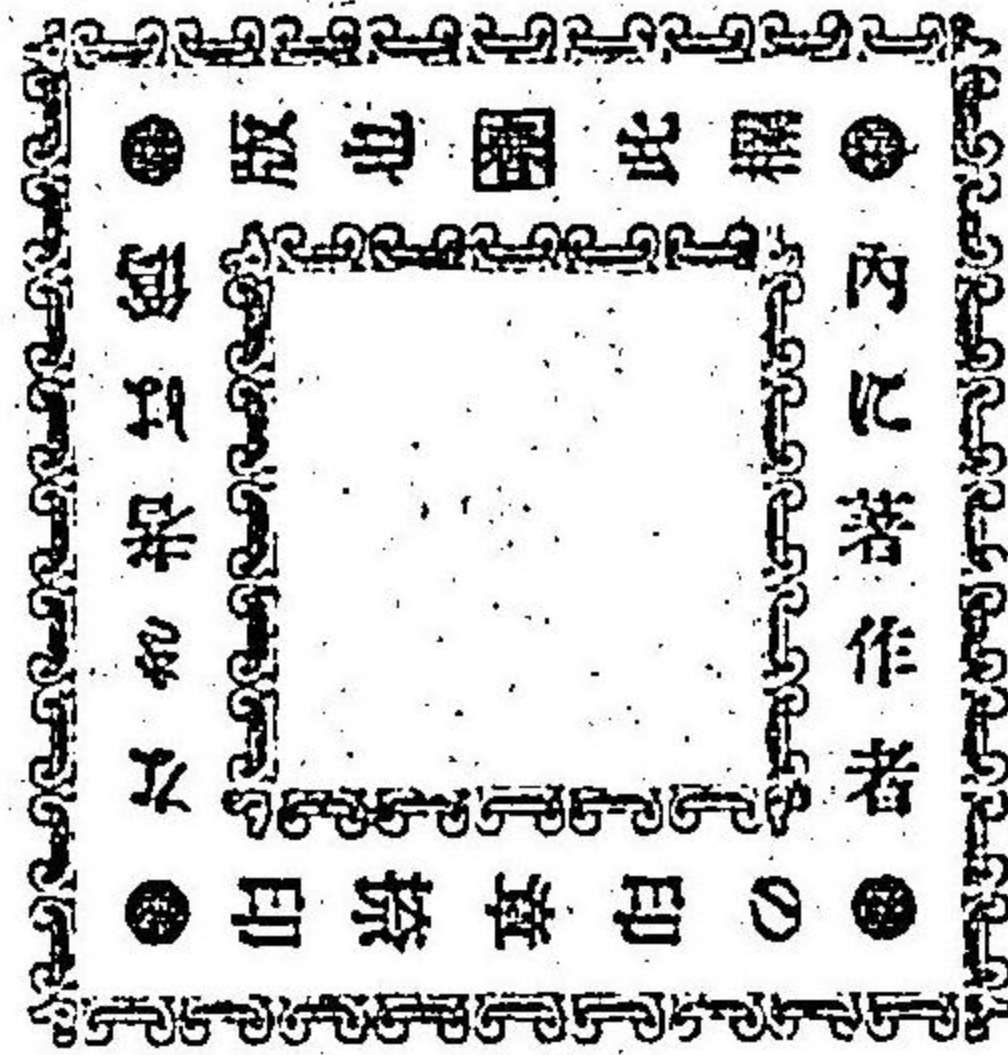
輪
柳終

ね他人とは決して思はない君も隔意なくヤツて呉れ玉へ實は僕も僕の疑
 心が暗鬼を生じたのだが君もまたよく打明けて呉ればよかつたのに、ア
 ラ今左様な恨ッばい事をそれやこれやがあつたので又よく芝山さんの傍
 心も分かつたのでは有ませんか、左様さ夫だから恨むといふのではない
 只餘計な心配をさせた酷い男だといふだけよ先づ其の目出度罰金を一献
 目出度罰杯の己も傍相伴オツト十二分十二分、折から戸外に新聞賣、大
 勝利號外大勝利大勝利
 友人雪中庵雀志翁句ありかりて以て扇を結ぶ
 輪柳の解けて目出たくしかな

きせわた 大尾

明治二十八年十二月十二日印刷
同 年十二月十五日發行

版 權 所 有



著 者 饗 庭、篁 村

東京市日本橋區通四丁目五番地

發 行 者 和 田 篤 太 郎

東京市牛込區市夕谷加賀町一丁目廿三番地

印 刷 者 根 岸 高 光

東京市日本橋區通四丁目

發 行 所 春 陽 堂

電話五拾壹番

東京市牛込區市夕谷加賀町一丁目十二番地

印 刷 所 株式會社 秀 英 舍 第 一 工 場

(電話十九番)

きせ綿與付
實價金貳拾錢

特別割引箋

稟告

- 一 江湖御花主様方の御取立により日に倍し盛大に相成奉深謝候尙世運風潮に先立ち文學社會に錦々たる大家方の手に成る新規新案の原稿相選ひ挿置製本に注意し逐次出版致候間愛顧諸君方百倍御愛覽の榮を給はらん事を希望仕候
- 一 此實價書目の外百股の書籍は御命令に隨ひ御取次仕候間書名著者出版人等御記載御注文願上候尤も直段は無油斷他店より一層廉價に相働き候間自然高價にも差上候時は御申越次第直引可申候
- 一 送金方は内國通運便早速又は銀行或は江戸橋郵便本局宛等のかはせにて何れも前金に御願申上候
- 一 御注文書送三日以内に必ず出荷可仕候
- 一 此切取紙へ品物御書入御注文の御方へは該實價書目の内特別一割引にて御送り申上
- 一 郵券代用は一割増にて願上候
- 一 宿所姓名は可成御明瞭に楷書文字にて列然御認願上候
- 一 御親友御同僚中小説雜書御愛讀の御方の宿所御姓名御通知願上度拙店より早速書目御送り可申候
- 一 前件申述候通り下段及裏面に書入場所有之候間御注意願上候

東京日本橋
通四丁目角

春陽堂

和田篤太郎

電話五十一番

切取線

書籍を購せらるる諸君の住所氏名

御注文主住所氏名

--

--

要摘書文	箋 文 注						書 目 冊 數
	金	金	金	金	金	金	
小計ノ金	金						書 目 冊 數
	金	金	金	金	金	金	
	運賃	郵税					書 目 冊 數

切取線

大元帥陛下御眞影

皇后宮陛下御眞影

各一面幅一尺一寸六分長一尺七寸五分二面買價八十錢特別減價六十四錢にて隨て頒布す郵税寄留料二面迄八錢

征清の宣詔
大御心を帝國臣民たる者朝夕御慶徳に感泣せずんや
御眞影敬寫の允許
沐浴
御正裝
注意周到
誠意誠心

日清交戦録

全部買價金貳圓特別減價金壹圓四十錢送料四十錢

好材料
戦死
戦功
野史正史

日清交戦録補遺

全二册合本正價四十錢 特別減價三十錢 紙數六百頁

新色懺悔

新色懺悔は著者が購買新聞紙上に感足を展べ得たる第一着の叙情小説なれば、其落想の奇、觀察の精行文の妙知るべきなり。

新色懺悔 聚芳十種之内
紅葉山人作
武内桂舟書
郵税四十五錢



二人 紅葉山人作
武内桂舟書
郵税四十五錢

此編に於て盡せりと謂ひつべし。新色懺悔の筆、銷魂斷腸の記、紅葉山人獨擅の技

命の安賣

命の安賣 文學世界之内
紅葉山人作
武内桂舟書
郵税四十五錢

命の安賣 紅葉山人作
武内桂舟書
郵税四十五錢

此編に於て盡せりと謂ひつべし。命の安賣の筆、銷魂斷腸の記、紅葉山人獨擅の技



女の隣 紅葉山人作
武内桂舟書
郵税三十錢

雪と見紛ふ櫻の木陰に、數奇悉したる一橋の主や、離れ、煙娟花の如き美人なるか、魁偉無雙の如き醜婦なるか、或は世に捨てられし尼なるか、或は世に出でたる流の身なるか、音聲も知らず、畫工も知らず抑も著者の心を知るものは、巻を細く讀者なるべし。



病の懺悔 紅葉山人作
武内桂舟書
郵税四十錢

此編唯甲乙の談笑し、張李の怒罵するを聞くのみ。敢て余事の筆を費さずと雖も、口氣真に逼りて、思や、嬌や、癡や、頑や、眉目自から畫くが如く、一舉一動躍々として己に不説の間に盡せり、紅葉山人が文と才とを打して一丸の土の團子即ち是なり。

紅鹿子

紅鹿子は夏瘦關東五郎の二編より成る。前者は燭を乗りて雨後の海棠を看むが如く人の怨を消魂せざるはなし。後者は什麼、全然面目を一變し來りて、湖頭月白く松影黒き處、怪禽一聲耳を掠むに似たらむか。讀者巻を捲きて慄然たるべし。

紅鹿子 紅葉山人作
武内桂舟書
郵税四十二錢



男の心 紅葉山人作
武内桂舟書
郵税四十五錢

男の心は東家西家の一小茶話に過ぎざるなり。一の奇なる無く、談更に傳ふべきものあらざる。文は坦々として險語を見ず、身々として警句を挿まず、譬へば柳外風度り、月下に水の流れむが如し。若夫披讀一遍せば、筆々傷まざる無く、悲まざる無く、言々愁へざる無し。蓋し情の最も切にして、文の最も至れるもの乎。



夏の小袖 紅葉山人作
武内桂舟書
郵税四十五錢

覆面の武士あり、一時辻斬を試む。刀利魔の如く、手練殆ど神なり。瘡るゝもの夜々幾百人、而して後影の捉ふべき無く、天下爲に騒然たりし、匿名出版の奇書即是なり。



那に 紅葉山人作
武内桂舟書
郵税三十錢

「なにかし」二巻は豫備兵義血の二篇を取めたり。冷々氷の如き豫備兵は、報國の熱によりて其身を燒き、烈々火の如き俠人は、然諾の重きが爲に其情を冷却せり。彼の熱、此の冷。人心の變幻なる、其境に應じて熱たり冷たりと雖も、感ずる所は一片の意氣なるのみ。百八十頁の快語は此意氣を説明して、迅雷、奔流、天を碎き、地を劈く概あり。若夫巻を披かば想に鬼氣ありて毛髮に逼り、文は異彩を放ちて顔色を照さむ。

八内之日書行發堂陽春京東

紅梅は歌麿の美人の如く、紅梅は北齋の妖婦の如く、紅梅は...



紅武實郵 三葉内價稅 人山桂五八 妻人舟十 作番錢錢

一代の偉才を抱いて世に容れられず、坎坷流落して江湖に沈没し、...



右門衛 實價三十錢 省亭米仙合作番

桂姫は如何なる美人ぞ、亂れたる世を慨し時を怒りて、...



新十二番之内 實價三十錢 三葉内價稅 人山桂五八

櫻痴居士の雙葉なる文才は、今世に傳へられず、...



富岡永洗番 實價三十錢 郵稅六錢

九内之日書行發堂陽春京東

夫れ着物にも餘所行と不斷着と、...



友誼山人作 仙實價二十錢 染郵稅四錢

著者已に夢中にして、書肆又夢中なり、讀者豈夢中ならざるを得ん、...



櫻痴居士作 小永興圖 實價廿八錢 郵稅六錢

高いたる山の山の上より、刮たる眼光を放つて下界を見下したるもの、...



櫻痴居士作 水野年方 實價廿五錢 郵稅六錢

櫻痴居士の雙葉なる文才は、今世に傳へられず、...



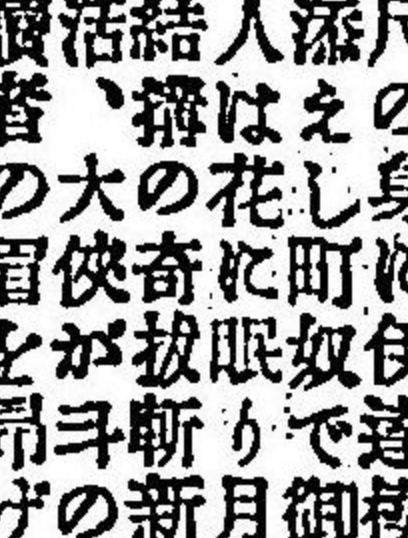
櫻痴居士作 三島蕉窓 實價廿五錢 郵稅六錢

尺の落花にう狐、伊達を袖く六止山を、...



村上浪六作 全 實價二十錢 郵稅四錢

回寄の讀活結人添尺の踏に吉男んそ、...



櫻痴居士作 實價廿五錢 郵稅六錢

かた糸

かた糸を彼方此方によりわけて、糸たか... 文學世界之内... 櫻痴居士作

此書の女主人公... 小夜子

五月蠅の世の中を、橋外一葉の芭蕉の蔭に避けて、... 櫻痴居士作



積理知放言... 櫻痴居士作... 郵税六十三錢



浪六氏が引絞つたる満月の弓勢... 萬小の奴... 郵税六十三錢



たそや行燈の影暗きところ... 燈行やそた... 郵税六十三錢



櫻痴新編... 櫻痴居士作... 郵税六十五錢

徳兵衛何人ぞ、或は俠客の如く、或は海賊の如く、... 櫻痴居士作



夜嵐... 武内桂舟密書... 郵税六十五錢



鬼奴... 武内桂舟密書... 郵税六十五錢



破太鼓... 水野年方書... 郵税六十五錢

二十内之日書行發堂陽春京東



三日月の影にチラと見えし... 女之助は男なり、此書はかきあらす御断り申す。



主も取らず君にもつかへず... 男見、深見重左が半生を例の陳放の筆にて豪然と描き出でたる大々文字なり。



安田 浦浪六作 渡邊省亭 密書 郵税四 銭

井上 浪六作 村野 年方 實價三十 銭

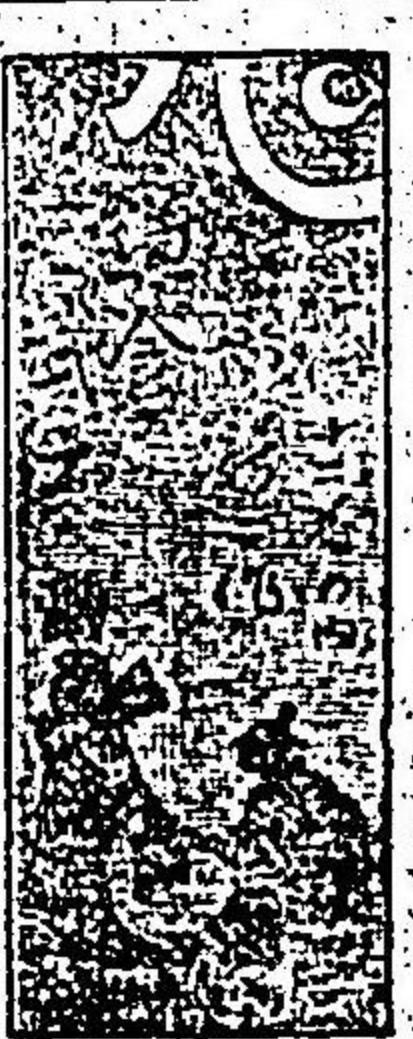
深見 村 上 浪 六 作 實價廿五 銭

安田 浦浪六作 渡邊省亭 密書 郵税四 銭

元龜天正に明智が三羽鳥と唄はれしその一羽の勇士、本能寺の一番駈して織田信長に槍をつけし曲者、死して亂臣賊子の墓を踏躰の唐津に殘せしが、いま浪六氏の筆に吊はれて懐かしく可憐の老武者となりぬ、あはれ世に上幾多の才子佳人よ月雪花に飽いて夜静なる枕頭、燈火の影に緋いて三百餘年の昔を忍び、鬼の目よりも泣れし當時の涙を今に汲み玉ふもまた一興ならむか。



川上 浪六作 實價二十 銭



此書は大名の興と表との昔の様を寫せし滑稽なれば新奇の趣向神妙の筆鋒を以て、如何なにかむし家なりとも、抱腹絶倒に堪へざらむべし一讀して其蘆ならざるを知り給ふべしと申す。

三十内之日書行發堂陽春京東



白髭の森に俗塵を避けて、墨水の流に錦腸を洗ひ、夜々筆を執つて漫筆を草す、風蕭々として雨の艶たるの時、氏が筆端は忽ち馳せて、或は藤娘の艶となり、御若衆の麗となり、雷の如く吐號し、沙頭面如く、奴の律義となり、雷の如く吐號し、沙頭又近時無双と稱せらる。而して桂舟子大津繪の活幅、



三年味、青嵐の二篇は合して萬紅葉となれ、人の眉山人が當年の傑作、青嵐は浮世の裏に潜む美しめ、怪を寫し出し、窈窕たる處女が其渦中に苦み、したれ、然かも汚穢に染まざる一點の靈氣を點してあす所なきは、三年味、山人得意の所なるべし。



川上 浪六作 實價二十 銭

武内 桂舟 實價四十 銭

武内 桂舟 實價四十 銭

川上 浪六作 實價二十 銭

二枚拾は白藤機機二篇より成る。婉曲清潔、入神の筆を以て優に宛轉たる情思を描盡するもの、白藤なり。後國風急にして花を落る事類に、紛然地に委して空しく香魂の泣くを見る。句々悉く詩壇の異彩にして遙かに他流に傑出したるもの、沈壇一筆、仔細に作者が理想の那邊にあるを味ひ來らば、無沙たる神韻の更に幽宮の消息を傳ふるものあらむ。



田邊太一君著 實價十五 銭



武内 桂舟 實價八 銭

武内 桂舟 實價八 銭

武内 桂舟 實價八 銭



は國朝子が一世的佳作にして、天明寛政文化文政
天保弘化時代の接續の逸話より有名なる文政
書齋工狂歌師及作者等の傳記を口述したるもの
にして、忽ちにして、殊に酒井具造子、忽ちにして美
花に泣く概あり、殊に酒井具造子、忽ちにして美
たなるものなれば、一讀忽ち朝子の熱練なる筆記
て、其巧みなる辨舌を聞くに異ならざるべし。

三遊亭圓朝作
武内桂舟書
郵税六十五錢



夏草やつはもの
國亡ひて山河あり、衣笠山の峰の月は轉た三浦家
の音を懐はしむ、源平の興亡鎌倉の悪業、忠臣節
婦勇士、智將將々、平の興亡鎌倉の悪業、忠臣節
一書にあり、櫻の御所と並び傳へて三浦名所の逸史
とも見よ、今や王師外に提つて、向武の氣象内に勃
由來するを知らん。

衣笠城
村井松齋著
小林永興書
郵税六十錢



選の
忍月居士作
武内桂舟書
郵税三十錢

臥待月

臥待月は南窓外史が著す所、當代の紳士令嬢の
情交を描き盡して、後庭春陵く鳥まさにうたふ。

闇中政治家

闇中政治家
原芳十種の内
後藤若景書
郵税四十錢



荒海實一は如何なる人ぞ、本所なる養育院に成
長したる人物にして、後三美人の贊助を得て遙か



征清の軍未だ央なる今日此の頃、巍然天際を凌い
で名はれ出し、年月は古の奈其の都の片邊りな
る京都の山に在りける古城なり、著者水氏一
小補公の墓に詣りて、其胸を衝いて、溢れ出でたる
詩想を其儘、半月城と銘打ちたり、巻を挿けは
少年、殆んど讀者として巻を挿けたり、忽ちにして勇士美
然して、雪の西京なる附録は著者が當年節を彼
の地に曳きたるの時名所古跡を、一巻の筆に収め
て、詞藻麗麗身其景に接するが如し、如今博覽會開
會の時、雪の西京は遊覽者の爲め、能き東道者た
らむ。

半運塚麗水作
三島燕窩書
郵税三十錢

やたらと

やたらと
山田美妙作
郵税二十錢

新作十二巻の内
大森芳知書
郵税三十錢

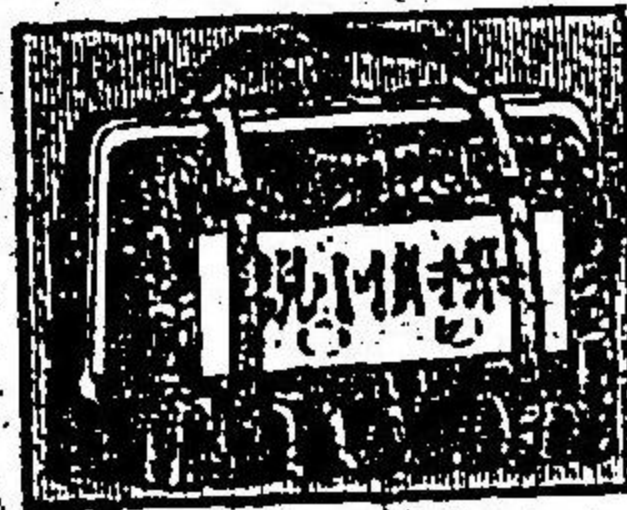
闇中政治家
原芳十種の内
後藤若景書
郵税四十錢



文 半紙木版摺彩色
表紙頗美本各一
冊讀切實價八錢
郵稅二錢宛

數錢の金に可憐大丈夫が便々たる腹割さばいたる
奇談を始めとして、古英雄の胸腹を割りたる猿面
冠者の快よき、かた糸辻占賣の哀れに悲しき、か
くれんぼの不思議なるは正太夫が洒落の筆にな
り、野試合の勇ましきは水産子の健筆に依つて描
かれぬ、ひつじかひは牧童の可憐なるを寫したる
松華菴の理想殆んど神に通じ、今深雪の哀れなる
は雪に暮れ行く漁村の寂しきが如く、乙羽菴の
もひ川、露友子の神も佛も及び柳涙子のいと見
の三編は筆力勇健にして天馬の空に騰るが如く、
又嫦娥の蒼穹に飄むるの情趣あり。

- 第一 紅葉作命の安賣 全一冊 讀切
- 第二 山人の安賣 全一冊 讀切
- 第三 妙齋作猿面冠者 全一冊 讀切
- 第四 階堂作かくし妻 全一冊 讀切



探偵小説 第一集 全一冊 讀切
第二集 全一冊 讀切
第三集 全一冊 讀切
第四集 全一冊 讀切

立案新奇にして能く人の
の意表に出で、讀者を
して傑然、惘然、愕然、
呆然、身其の境に在り
て、心其の局に迷ふが
如くならしむるは探偵
小説に如くものなし。方今感情的小説の流行太甚
だしく、事實的小説全く形を敍めてより、世間人
心を活殺する感奇譚に渴すること久し。此の書は
専ら道般の需要に供せんが爲に、特に脚色の奇絶
妙絶拍案三嘆に堪ふべきものを採撰し、平易の文
章を以て自在に亂麻の活劇を描き去り、毎巻一巻

幼稚園

幼稚園 四六版美本
實價各七錢

本編は巻を逐つて逐次發行するものにして小學生
童諸君の教師たり朋友たるものにして小學生
も平易簡潔なれば一枚置きに
校用又は家庭用の
適切なる事言を俟たず方今兒童用の書籍は實に
雖も實に此幼稚園に勝るの良書あらざるべし。

- 支那手柄はなし 全二冊
- 歴史繪はなし 全二冊
- 修身繪はなし 全二冊
- 鳥 全一冊
- 獸 全一冊

讀切として、騙窓、漁船、涼車、馬車中の好侶伴
たらん事を期す。去れば其價は及ばむ限り最低額
となし、以て讀過一番の後は途上に棄却して、些
との遺債なからしめんとす。

合巻 全一冊 五錢 郵稅各十二錢
第一集 全一冊 五錢 郵稅各十二錢
第二集 全一冊 五錢 郵稅各十二錢
第三集 全一冊 五錢 郵稅各十二錢
第四集 全一冊 五錢 郵稅各十二錢

高等探偵
木戸少佐
大毒藥
戀の嫉奴

- 第四 巖谷 占た 全一冊 讀切
- 第五 居直 占た 全一冊 讀切
- 第六 大正 占た 全一冊 讀切
- 第七 江見 占た 全一冊 讀切
- 第八 水華 占た 全一冊 讀切
- 第九 松華 占た 全一冊 讀切
- 第十 金子 占た 全一冊 讀切
- 第十一 春子 占た 全一冊 讀切
- 第十二 乙羽 占た 全一冊 讀切
- 第十三 主人 占た 全一冊 讀切
- 第十四 安田 占た 全一冊 讀切
- 第十五 露友 占た 全一冊 讀切
- 第十六 柳津 占た 全一冊 讀切

著名藝言實錄

全十卷 實價十五錢郵稅四錢宛
全部十册金一圓二十錢

釋史俗傳は嘘で堅め之居講釋はそら事多し世人既に今日正史なく實傳なきを憾む弊堂此度嚴秘の古寫本數十卷を得たれば是等を根據として豪傑偉傑の眞傳を編し其文體は通俗平易にして傍訓を施し今や其既成の稿本十卷に滿てり因て是を刊行して大方に頌つ諸君希くは愛覽を賜へ。

第一卷目次

大川友右衛門(御朱印箱の實錄) 法華 丈助進華往生の實錄
 前田 清繼(加賀越前守の實錄) 岡村 十兵衛(土佐村吏の實錄)
 奥平 源八(市谷復讐の實錄) 高田屋兵衛(遠藤商人の實錄)
 根岸 綱樹(刺殺奉行の實錄) 大石 眞虎(有職衛士の實錄)
 後藤 又兵衛(島田家臣の實錄) 袈裟 御前(盛道齋の實錄)
 矢部 定謙(市尹駿州の實錄) 上流 市兵衛(下條忠義の實錄)
 杉田 登岐(越前家老の實錄) 法 界 坊勤化名僧の實錄

第二卷目次

山田 長政(通稱傳説の實錄) 中山 愛親(殿中間答の實錄)
 松本庄右衛門(民権強訴の實錄) 佐々木 累女(孤人の實錄)
 神谷 貞(仙石監助の實錄) 荒木又右衛門(上野殿附の實錄)
 渡邊 政馬(上野殿附の實錄) 近藤 虎次郎(刀工出身の實錄)
 松前五郎兵衛(俠客危難の實錄) 三宅 康盛(島山領主の實錄)
 石河 政方(奉行名断の實錄) 大田 千江(胡蝶遊遊の實錄)
 瀧田 彌兵衛(蘭人降服の實錄) 廣田 勘助(貧持忠義の實錄)

第三卷目次

小野川三郎(有馬力士の實錄) 藤原 正常(片麻刀工の實錄)
 藤坂 七兵衛(前田家臣の實錄) 左 甚五郎(彫刻名匠の實錄)
 定四 法師(櫻海入道の實錄) 松田 孝(鏡山復讐の實錄)
 北條 春時(鎌倉執権の實錄) 藤原院長兵衛(江戸俠客の實錄)
 曲垣 盛澄(島術達人の實錄) 山城屋 和助(明治豪商の實錄)
 戸谷新右衛門(紀州義民の實錄) 萩田 主馬(前田殿助の實錄)
 支倉 常長(羅馬遣使の實錄) 島根三郎兵衛(大飲酒家の實錄)

第四卷目次

宮本 武藏(大劍術家の實錄) 金 忠 輔(外征偉人の實錄)
 關阿 法印(市村座主の實錄) 清水 新次郎(橋場復讐の實錄)
 平賀 源内(風來山人の實錄) 深井 志道軒(辻講釋師の實錄)
 徳川 吉宗(八代將軍の實錄) 伊勢屋 芳(芝居女探の實錄)
 文殊 九助(伏見俠客の實錄) 本間 孫四郎(号馬送人の實錄)
 山中 興之助(尼子家臣の實錄) 高橋作左衛門(書物奉行の實錄)
 伊達 宗重(仙臺殿助の實錄) 堀川 美代(奉公入姫の實錄)

史傳詩歌字典及雜書

征清忠魂帖 菊版美本
 寫眞版背入
 定價金卅八錢
 特別割引卅六錢

勇將猛卒の血國民の涙 の成果今日の如きも
 血と涙とは同なり、痛なき所、征清軍の
 に血と涙とはあらず、君よ、征清軍の
 勇將猛卒の血國民の涙を以て得たるものなら
 して又全編の主眼なる事を見よとす。

逸聞佳話 軍士容族の美事は別に逸戰死
 將校肖像を以て印刷したれば所美無此

久保田米偃君畫
 柵瀨軍之佐君著

朝鮮時事

朝鮮國王、大院君、袁世凱等の肖像挿入
 朝鮮の現狀は敢て詳述するの要なし、而して此の
 現狀を知り、此の現狀の及ぶ可き處を知り、及び
 朝鮮の政治、法律、社會、風俗、慣例等を知らんと欲
 する人は須らく本書を一讀するの必要ある可し。

全一冊
 價廿五錢
 郵稅六錢

幸ひにして著者は再び朝鮮に航して朝鮮の事情に
 精通す、其の範圍の筆、微細の察、添ゆるに書伯
 久保田米偃君の「實言書三十餘箇」を以てす、若夫
 れ今日の際はを細かば、身は恰も朝鮮に入るの想
 ある可し。

北支那雜記

吳卿居士通譯官向野堅一君著
 全壹冊讀切
 實價金十五錢
 郵稅四錢

口畫

北京城廓 萬里長城
 支那貴婦人風俗 服裝
 支那內地演戲場及俳優
 今や我第一軍運戰運の勢に乗じて清國の地に遊む一學風を披
 き再探天府を居り第二軍は旅順口を封鎖し北京を陥るは歴々踏
 な禁に指すか如し然れども北清の地たる遼寧漢口海軍内を嚙み白
 沙黃漢進軍の難關し少からず著者吳卿居士支那内地を周遊するも
 十年餘に北清の事情に精し今日此書あるに際し此書を著す福半な
 らず從軍の命を懸る故に北書著より完璧を以て許すべからず然れ
 ども北清の軍備、地理、制度、風俗、人情に就きその一斑を知る
 に餘あるや明かなり、附するに遼河の概況を以てす今日の時勢亦
 大に國民の覺悟を以て之を見る事要なるべし。

名實錄

全十卷
實價十五錢 郵稅四錢 宛
全部十册金一圓二十錢

稗史俗傳は唯で堅め芝居講釋はそら多し世人既に今日正史なく實傳なきを憾む弊堂此度嚴秘の古寫本數十卷を得たれば是等を挾摭として豪雄偉傑の真傳を編し其文體は通俗平易にして傍訓を施し今や其既成の稿本十卷に滿てり因て是を刊行して大方に願つ諸君希くは愛覽を賜へ。

第一卷目次

- 大川左右衛門(御朱印箱の實錄)
- 前田 清通(加賀國助の實錄)
- 奥平 源八(市谷復讐の實錄)
- 根岸 頼南(刺殺奉行の實錄)
- 後藤 又兵衛(黒田家臣の實錄)
- 矢部 定謙(市尹駿州の實錄)
- 杉田 登岐(越前家老の實錄)
- 法華 丈助(遊學往生の實錄)
- 岡村 十兵衛(土佐村吏の實錄)
- 高田屋源兵衛(遊航商人の實錄)
- 大石 眞成(有職階伯の實錄)
- 製茶 御前(遊學遊藝の實錄)
- 上總 市兵衛(下俣忠義の實錄)
- 法 界 坊(勤化名僧の實錄)
- 中山 愛親(殿中間答の實錄)
- 佐々木 累(女一人の實錄)
- 荒木又右衛門(上野殿尉の實錄)
- 近藤 虎徹(刀工出身の實錄)
- 三宅 康盛(山嶺主の實錄)
- 大田 千江(娼妓遊遊の實錄)
- 池田 勘助(繪持忠義の實錄)

第三卷目次

- 小野川喜三郎(有馬力士の實錄)
- 脇坂 七兵衛(前田家臣の實錄)
- 定四 法師(機傳入道の實錄)
- 北條 泰時(鎌倉執權の實錄)
- 曲垣 盛運(馬術達人の實錄)
- 戸谷新右衛門(紀州義民の實錄)
- 支倉 常長(羅馬遣使の實錄)
- 源 隆 正常(片腕刀工の實錄)
- 左 甚五郎(彫刻名匠の實錄)
- 松田 妙察(銀山復讐の實錄)
- 藤原院長兵衛(江戸俠客の實錄)
- 山城屋 和助(明治家臣の實錄)
- 萩田 主馬(高田國助の實錄)
- 馬場三郎兵衛(大飲酒家の實錄)
- 金 忠 輔(外征偉人の實錄)
- 清水 新次郎(橋場復讐の實錄)
- 深井 志道軒(辻騷擾師の實錄)
- 伊勢屋 妙芳(芝居女祿の實錄)
- 本間 孫四郎(弓馬達人の實錄)
- 高橋作左衛門(書物奉行の實錄)
- 堀川 美代(奉公入娘の實錄)

第四卷目次

- 宮本 武藏(大劍術家の實錄)
- 關阿 法印(市村座主の實錄)
- 平賀 源内(風來山人の實錄)
- 徳川 吉宗(八代將軍の實錄)
- 文殊 九助(伏見俠客の實錄)
- 山中 應之助(尼子家臣の實錄)
- 伊達 宗重(仙臺國助の實錄)

第二卷目次

- 山田 長政(遊學偉蹟の實錄)
- 松本莊右衛門(民権強訴の實錄)
- 神谷 貞(仙石騒動の實錄)
- 渡邊 敬馬(上野殿尉の實錄)
- 松前五郎兵衛(俠客危難の實錄)
- 石河 政方(奉行名跡の實錄)
- 濱田 彌兵衛(蘭人降服の實錄)

欠

MISSING

新三國誌 郵實新三國 稅價版美裝 四十五錢 本誌

朝鮮支那諸名士詳傳並肖像挿入 我日本帝國は朝鮮の獨立を扶植し大に...

榎本海軍中將序 毛鐵道人著 清佛海戰日記 定價二十錢 郵稅四錢

口書 福州城廓 全部寫真石版 福州海岸砲臺 全部寫真石版 兩艦隊接戰 全部寫真銅版

本書は多年支那各地に官遊したる有名なる北清見聞録の著者仁禮...

古今史譚 全五冊紙數每冊二百頁以上全部一千一百頁餘製本古雅...

東照公病中の御手療治 ●高松城將清水長左衛門の義死 ●明智光秀死せざるに就き...

第四卷目錄 駿河大納言忠長卿の事蹟 ●鬼作左事蹟 ●松平外記殿中刃傷始末 ●生駒家騷動...

修身書とさ 全四冊和綴半紙版中書數十個挿入製本優雅...

衣服裁縫獨案内 全二冊 實價十八錢 郵稅四錢

工書 教授案 實價廿五錢 郵稅四錢

著日清交戰軍用地圖

我征清軍の進みたる處、攻撃を加へたる處、占領したる處を知らんと欲せば、日清交戰軍用地圖を見よ。本圖は尤も見易く且眼球に害を及ぼさぬ事を見れば進物などには最も適切なものなり。

諸大家小説花籠

小説花籠 實價八錢 郵税四錢

大日本臺灣澎湖全圖

清國奉天省日本占領地全圖

朝鮮全圖 北支那全圖

各一折 定價五錢 實價四錢 郵税四錢

征清軍一たび起りて我が軍連戰連捷の結果臺灣全島及び澎湖列島皆帝國の新版圖に歸す

して平和茲に克復す、吾人生れて大帝國の臣民たる者誰か其地形風土を知悉せずして可ならんや、又遼東半島は我れの彼れに還附すべきの地たるも是れ我が軍が百戰千鬪血を流し骨を暴らして占領したるもの亦之を忘るべからず、本圖は實地百萬分一圖にして極めて精確なる材料に據て之を編纂し特に臺灣圖は物産々地の如き一々之を示し、又遼東半島日清交戰地は悉く一種の記號を以て之を標示し眞に一目瞭然覽者をして其の遺憾なからしむるを期せり、若し夫れ朝鮮全圖及び北支那全圖も亦均しく精確詳密固より臺灣圖と其撰を同ふす且三國共に裏面には亞細亞洲圖及び日清韓三國連絡地圖を印刷して以て容易に彼是の關係を明知するの便を計れり故に此の三圖は編纂實に精確にして印刷鮮明紙質善良、寔に忠誠勇武なる帝國々民に向て其要望を充たすの點に於て優に世上幾多の地圖中嶄然一頭角を顯はせると信じて疑はざるなり。

通俗病理問答 第一編 内科の部

石黒忠應先生評序 谷口神太郎君纂譯 附即治法 實價十八錢 郵税四錢

皮膚の病 第一章 皮膚の病 第二章 呼吸器の病 第三章 消化器の病 第四章 泌尿器の病 第五章 生殖器の病 第六章 皮膚の病 第七章 皮膚の病 第八章 皮膚の病 第九章 皮膚の病 第十章 皮膚の病 第十一章 皮膚の病 第十二章 皮膚の病 第十三章 皮膚の病 第十四章 皮膚の病 第十五章 皮膚の病 第十六章 皮膚の病 第十七章 皮膚の病 第十八章 皮膚の病 第十九章 皮膚の病 第二十章 皮膚の病 第二十一章 皮膚の病 第二十二章 皮膚の病 第二十三章 皮膚の病 第二十四章 皮膚の病 第二十五章 皮膚の病 第二十六章 皮膚の病 第二十七章 皮膚の病 第二十八章 皮膚の病 第二十九章 皮膚の病 第三十章 皮膚の病 第三十一章 皮膚の病 第三十二章 皮膚の病 第三十三章 皮膚の病 第三十四章 皮膚の病 第三十五章 皮膚の病 第三十六章 皮膚の病 第三十七章 皮膚の病 第三十八章 皮膚の病 第三十九章 皮膚の病 第四十章 皮膚の病 第四十一章 皮膚の病 第四十二章 皮膚の病 第四十三章 皮膚の病 第四十四章 皮膚の病 第四十五章 皮膚の病 第四十六章 皮膚の病 第四十七章 皮膚の病 第四十八章 皮膚の病 第四十九章 皮膚の病 第五十章 皮膚の病 第五十一章 皮膚の病 第五十二章 皮膚の病 第五十三章 皮膚の病 第五十四章 皮膚の病 第五十五章 皮膚の病 第五十六章 皮膚の病 第五十七章 皮膚の病 第五十八章 皮膚の病 第五十九章 皮膚の病 第六十章 皮膚の病 第六十一章 皮膚の病 第六十二章 皮膚の病 第六十三章 皮膚の病 第六十四章 皮膚の病 第六十五章 皮膚の病 第六十六章 皮膚の病 第六十七章 皮膚の病 第六十八章 皮膚の病 第六十九章 皮膚の病 第七十章 皮膚の病 第七十一章 皮膚の病 第七十二章 皮膚の病 第七十三章 皮膚の病 第七十四章 皮膚の病 第七十五章 皮膚の病 第七十六章 皮膚の病 第七十七章 皮膚の病 第七十八章 皮膚の病 第七十九章 皮膚の病 第八十章 皮膚の病 第八十一章 皮膚の病 第八十二章 皮膚の病 第八十三章 皮膚の病 第八十四章 皮膚の病 第八十五章 皮膚の病 第八十六章 皮膚の病 第八十七章 皮膚の病 第八十八章 皮膚の病 第八十九章 皮膚の病 第九十章 皮膚の病 第九十一章 皮膚の病 第九十二章 皮膚の病 第九十三章 皮膚の病 第九十四章 皮膚の病 第九十五章 皮膚の病 第九十六章 皮膚の病 第九十七章 皮膚の病 第九十八章 皮膚の病 第九十九章 皮膚の病 第一百章 皮膚の病

通俗病理問答 第二編 外科の部

實價金十八錢 郵税四錢

頭部の病 第一章 頭部の病 第二章 頭部の病 第三章 頭部の病 第四章 頭部の病 第五章 頭部の病 第六章 頭部の病 第七章 頭部の病 第八章 頭部の病 第九章 頭部の病 第十章 頭部の病 第十一章 頭部の病 第十二章 頭部の病 第十三章 頭部の病 第十四章 頭部の病 第十五章 頭部の病 第十六章 頭部の病 第十七章 頭部の病 第十八章 頭部の病 第十九章 頭部の病 第二十章 頭部の病 第二十一章 頭部の病 第二十二章 頭部の病 第二十三章 頭部の病 第二十四章 頭部の病 第二十五章 頭部の病 第二十六章 頭部の病 第二十七章 頭部の病 第二十八章 頭部の病 第二十九章 頭部の病 第三十章 頭部の病 第三十一章 頭部の病 第三十二章 頭部の病 第三十三章 頭部の病 第三十四章 頭部の病 第三十五章 頭部の病 第三十六章 頭部の病 第三十七章 頭部の病 第三十八章 頭部の病 第三十九章 頭部の病 第四十章 頭部の病 第四十一章 頭部の病 第四十二章 頭部の病 第四十三章 頭部の病 第四十四章 頭部の病 第四十五章 頭部の病 第四十六章 頭部の病 第四十七章 頭部の病 第四十八章 頭部の病 第四十九章 頭部の病 第五十章 頭部の病 第五十一章 頭部の病 第五十二章 頭部の病 第五十三章 頭部の病 第五十四章 頭部の病 第五十五章 頭部の病 第五十六章 頭部の病 第五十七章 頭部の病 第五十八章 頭部の病 第五十九章 頭部の病 第六十章 頭部の病 第六十一章 頭部の病 第六十二章 頭部の病 第六十三章 頭部の病 第六十四章 頭部の病 第六十五章 頭部の病 第六十六章 頭部の病 第六十七章 頭部の病 第六十八章 頭部の病 第六十九章 頭部の病 第七十章 頭部の病 第七十一章 頭部の病 第七十二章 頭部の病 第七十三章 頭部の病 第七十四章 頭部の病 第七十五章 頭部の病 第七十六章 頭部の病 第七十七章 頭部の病 第七十八章 頭部の病 第七十九章 頭部の病 第八十章 頭部の病 第八十一章 頭部の病 第八十二章 頭部の病 第八十三章 頭部の病 第八十四章 頭部の病 第八十五章 頭部の病 第八十六章 頭部の病 第八十七章 頭部の病 第八十八章 頭部の病 第八十九章 頭部の病 第九十章 頭部の病 第九十一章 頭部の病 第九十二章 頭部の病 第九十三章 頭部の病 第九十四章 頭部の病 第九十五章 頭部の病 第九十六章 頭部の病 第九十七章 頭部の病 第九十八章 頭部の病 第九十九章 頭部の病 第一百章 頭部の病

間福利の階級 資質の區別 發力の強弱 此書は人體解剖の細圖を付し各自治療の出來得る 様藥名調合法及養生法等詳細に記載あり

橋爪譯 男女交合新論

全金六十員 郵税四員

本書は東京淺草瀨山佐吉なる者所著なる類似偽板出版致し 直に差止候へ共地方賣捌へ直段の安き爲め回り居り候哉も難 許候間著者及出版所御吟味の上御買問 遠なき様御注意願上候

通俗 男女自衛論

合卷 一冊 實價十八員 郵税四員

- 卷之一 房事の事
卷之二 手淫及多淫の害
卷之三 遺精生殖無功并に生殖不能の論
卷之四 淋病、消渴、尿道狹窄、膀胱癌病、 畢丸腫及膀胱帶の病
卷之五 婦人手淫の害

生子の説 第廿六段生に可なる日時を論ず 第廿七交婚に付ての 注意 第廿八交婚は全身の作用を促動す 第廿九精神の喚起と並 助は設生に害あり 第卅情慾を節制するに害あらざる説 第卅 一亂雜の交婚は爲すべからず 第卅二妻を害する説 第卅三 三選孕は天理に背く事 第卅四妻を害する説 第卅五精 神の愛は遺孕の眞法なる事 第卅六子宮なき原因及び其治法を論ず 第卅七陰部解剖の學を世に普及する事の必要なる説 第卅八精 蟲の説 第卅九卵の構造及び其効用 第卅十陰莖の構造及び其 効用 第卅十一尿道と攝護腺との構造及び其効用 第卅十二龜頭 及び包皮の構造及び其効用 第卅十三子宮の構造及び其効用 第 卅十四陰道の構造及び其効用 第卅十五卵巣の構造及び其効用 第 卅十六男女の陰具は互に能く適合す 第卅十七陰具の摩 擦は全身の作用を起す 第卅十八壓力は交婚に必要なり 第卅十 九孕婦の説

故三條實美公題辭 岡谷繁 實著 名將言行錄

田口文之序并評 安井衡閣古賀煜評

全部四十卷洋紙刷和裝大形本紙數一千三百八 十頁映入合本四冊實價一圓八十錢送費廿錢

將名 我邦古來史籍に乏しからずと雖も概ね本紀又は傳記の跡 載にたりて名賢の言行を省略するもの多し偶徳川時代儒 者の手に成るものあれば悉く擲る所ありて殊更に其筆を 曲るもの多し國史編纂の材料殆んど尋ねべからざる今日 著者岡谷氏實に十五六年の長日月を費やして北條時代よ り徳川氏に至るまで百七十八名士の言行を詳叙するもの あり徳川氏に至るまで百七十八名士の言行を詳叙するもの あり徳川氏に至るまで百七十八名士の言行を詳叙するもの あり

- 谷氏編に此書の編纂を企てたるは實に安政甲寅之歲にして爾來家藏の秘書は固より諸家の書庫に就て 涉獵する事殆ど一千二百五十一部の多きに達し漸く明治己巳の年に至り甫めて脱稿するを得尙再三添 刪核訂したる其間の辛苦實に言ふべからず然して編纂の材料殆んど尋ねべからざる今日 逝去年月等を叙し更に年代實歴を擧げて言行を項叙したり卷中掲ぐる所の目次は(一)北條長氏全氏康 全氏規全編成(二)太田資長全資正長野業正(三)尼子經久山中幸盛今川義元三好長慶龍造寺隆信荒木村 重(四)毛利元就全秀元(五)吉川元春全元長全廣家(六)小早川隆景(七)武田晴信(八)武田信繁板垣信形 原虎胤山本晴行甘利晴吉(九)馬場信房山縣昌景(十)高坂昌信内藤昌豊(十一)眞田幸隆全昌幸全信幸 十六)上杉輝虎(十三)上杉景勝(十四)宇佐美貞行本莊繁長甘精景持全清長(十五)眞田兼續藤田信吉 十六)上杉謙信(十七)柴田勝家佐々成政瀧川一益丹羽長秀全長重佐久間信盛全盛政(十八)明智光秀全 光春(十九)細川藤孝全忠興(二十)前田利家(廿一)蒲生氏郷竹中重治(廿四)長曾我部元親全盛親宇喜田 中川清秀前田玄以森長康山内一豊池田輝政(廿三)浦生氏郷竹中重治(廿四)長曾我部元親全盛親宇喜田 秀家全直家(廿五)島津義久全義弘全家久伊達政宗(廿六)戸次鑑連高橋鎮種(廿七)立花宗茂(廿八)稲葉貞通 秀吉(廿九)黒田孝高(三十)黒田長政輝須賀家政富田知信佐野了伯(卅一)鍋島直茂(卅二)稲葉貞通 中吉政(卅三)加藤光泰磯野長政全幸長堀尾吉晴(卅四)増田長盛渡邊了大谷吉隆長正家嘉明中村一氏田 則可見吉長福島治重大崎長行吉村宣充(卅五)加藤清正(卅六)石田三成島友之小西行長(卅七)藤堂高虎 (卅八)京極高次寺澤廣高松倉重政仙石秀久脇坂安治(卅九)片桐貞盛木村重成後藤基次(四十)眞田幸村 全幸昌

大賣捌所

東京市日本橋區通四丁目

春陽堂

凱旋土産

凱旋土産は尊貴なる皇室を始め奉り日清戦局に参... 皇太子殿下御影 皇太子殿下御影 皇太子殿下御影...

凱旋土産 西朝用美術品 洋紙一枚 尺一寸五分 寸八 寸七 寸一



宮崎三味 武内桂五 實價四錢

俠女ありお龜といふ、殺生關白を掌中に弄して、... 暁平樂を吐けども、彼必らずしも涙なきにあらず、...



櫻痴居士 井年峰 實價六錢

本書は櫻痴居士が得意の院本なり、豊島練馬兩家...



加藤平著 陣野恒 實價三十錢

明未傑士あり、忠節獨り凛烈、孤松寒風に秀で梅... 花苦節を守る朱成功、父は唐土母は日本、和藤内...



宮崎三味 渡邊省亭 實價三十錢

見交す袖も比翼塚、後の浮名に致りたる、目黒... 里の糸が井の一人は金の光の標に惚れて通ひ...



以心賞小 井年峰 實價六錢

讀賣新聞なるものあり、大いに力を文學にいたす、... 往年賞を懸けて傑作をつのる、本書は實に其賞中...



瀧口入道
懸賞小説
水野賞
郵實 六州
税價 六州
銭錢 六州

花に戯れ月に浮かれ、權花一朝の榮に誇れる平家の世に、一人骨を叩き肉を振りて天下を睥睨したる武士あり、瀧口時頼といふ、人は彼を没情漢といひ、解知らずと罵しりしが、此没情漢も遂に名姫横笛の色香に迷ひ、其情なかりし人を怨みて世を捨て、小松内府が知遇に背きたるも、一に戀の成す仕業なり、後年高野の山腹幽邃高雅なるの處、舊主維盛の來るに逢ひ、涙を揮つて諫言を奉り、空しく主君を海底の藻屑となしてより、身も遂に屠腹して死するに至る、義烈殆んど稀に見るもの、これ日就社懸賞小説當年唯一の傑作と稱せらる。

おあき

水野賞
懸賞小説
郵實 六州
税價 六州
銭錢 六州

血の涙

笹齋居士作
富岡永洗書

我日の本の櫻の花を移し植えたる金州城に、一男見の血精花の如きあり、金石大尉といふ、事あり時を憤慨して空しく自刃す、遺族雲を隔て、本國に在り、日に大尉の凱旋を待つ、燕雁幾たびか去來すれども主は歸らず、鬼の如き老婆の苦しむる所となり、悲痛慘憺たる状人をして酸鼻に堪へざらしむ。

海戦日録

海軍大尉子爵
小笠原長生著

海軍大尉子爵小笠原長生氏は金波樓主人として深く文事に精通す、黄海の役より戦局平定に至るまで、軍艦高千穂の分隊長として激戦數回、其自ら經歷したるの快事を筆にしたるもの、我帝國の海戦史と雖も、精通これに優る事能はざらん、

澁村園藝州の近作、戦勝の餘威を借つて、日出國の旗幟天に冲するの所、一美人一兵士あり、情緒纏綿、言ふ可くして言ふ能はざるの妙趣、躍如として紙上に充つ。

夏祓

石橋忍月
鈴木華郵
實價 六州
税價 六州
銭錢 六州

若殿様の可笑しき、其士通信の不思議なる、戦話断片の勇ましき、訥軍曹の哀れに面白き筆端走る所電霆之れに乗ず、忍月居士近世の傑作。

淨瑠璃阪

澁村園藝著
小林永興
實價 六州
税價 六州
銭錢 六州

牛門淨瑠璃阪の奇談、江戸川の流と共に今に傳はりて、江湖幾万人の喝采を博す、義人烈士妖女美人、忽ちにして劍撃忽にして軟語、一讀巻を掩ふに忍びず。

海戦史

川崎紫山著

海戦日録は軍事上の觀察を以て筆を走らし、海戦史は歴史的政治的眼光を以て觀察す、海戦其者に至りては異なるなしと雖も、觀察の相違は筆端に於いて雲泥の差あり、見よ海戦尤も激甚なるの所、筆鋒愈々奇烈なるを。

陸戦史

川崎紫山著

柴山川崎三郎君、東洋の風雲を驅つて鶴林に航し、軍に平地に從ひて得るところあり、爾來久しく京城に止まりて時事を觀察し、歸來筆をばせて我國民の爲に陸戦史を草す、混成旅團の出發より全軍字品に凱旋する迄、巻を披けば颯爽として冷風面を撲ち、耳を塞げば陰雷轟き、眼を覆へば兵馬湧く、これ日清戦史中の玉麒麟。

八十五内之目書行發堂陽春京東



陸齋居士作
鈴木華郵書

他はこれ東海日出國の海男見、一はこれ扶桑神州の一健兒、一は海軍に一は陸軍に、兄弟相携へて國難にあたり、危大國を環破して、神州の威八荒に振ふの時、列國の猜みは端なくも大戦亂となりて、扶桑國の健兒悉く奮ひ立つ、此時にあたり身を抛つて敵の火藥庫をやき、奇策を建て、水雷を用ひ、終に敵將を旗艦に罵しり、鎗旗を擡して城下の盟をなさしむるに終る、愉快絶、踊躍處を失はしむるに至りて止む。

冷熱

手を蹴へせば風となり手を覆へば雨、冷熱の奇嬌なるは其表題の奇なるに優る、紅葉山人百餘種の著述の裡、自ら許す所のもの、又喋語の用ゆ可きなし。

尾崎紅葉作
高岡永洗書
實價六州錢

最上川

一は紅顔の美少年、一は妙齡の少女、兄妹思を凝して仇敵を求むるの間、悪徒の毒は鳩より甚たしく、善人くるしみ悪人さかふ、天は殆んど情なきに似て然も涙あり、風吹き雲散するの時、天日再び光を恣まゝにして、飛箭あり仇氏を亡ぼす、これ人生正に然るべきの道なり。

水滸野年方國作
實價六州錢

惟任日向守

本能寺深幾尺、未だ東雲の霧破りて、颯と柳曳く一旅の旗は桔梗の紋所、信は日向奴といふ間も通し、日頃の憤恨發して萬丈の炎となり、鬼神と稱せられる右大臣を殺したる英雄の胸中、今其人來り其志を述ぶるが如く、讀去り讀來りて感歎頗なり。

石橋忍月作
武内桂舟書

45
276